

この時、最も活躍して我軍を窮地より救つてくれたのは爆撃機です。もし、爆撃機の活躍がなかつたら、我軍は非常な苦戦に陥つたらうと思ひます。

飛行機の爆弾投下の威力がどんなものであるかを私は今度初めて實見して驚歎しました、一發の爆弾が投下されると、約二三反歩の面積に亘る土がそつくり裏返しになつてその中心は約五六尺の深さに土が扶ぐられてしまひます。故に充分一町四方の人馬は莫大の被害を與へる事が出来る譯です。……ホウ、飛行機といふ奴は全く怖ろしいもんぢやなア……この日には、所謂多門師團長の名戦術敵陣中央突破が強行され、小興屯、三間房、大興屯に占據する馬軍の中央部隊を一舉に潰滅せしめました。敵がドツと崩れ立つて見ると、息をつかせず、追撃！ 又追撃！ 矢つぎ早に前進命令が下りました。

空からは飛行機が縦横に旋回して、爆弾を投下する、土烟が龍巻のやうに立昇る、土烟が晴れたと思ふと、飛行機は忽ち次の攻勢に移つて、銀色の機翼を

斜めに機首を地上へ向けて巧みに旋回し乍ら、潰走する敵兵に機關銃の雨を浴びせかけます。いや、その痛快さ言はん方なしです。……フウ、勇ましいのう……地上には装甲自動車、タンクの活躍、新兵器の猛襲に逢つて馬軍は一堪りもなく中央部を突破されて、忽ち凹字形になつてしまひました、丁度一直線に引張つた紐の中央をつまんでつまみ上げたやうになりました。

我軍は意氣衝天、いよ／＼破竹の勢ひ、敵に寸時も立直る隙さへ與へないで前進々々又前進！ 猛撃に猛撃を加へて、同日正午には早くも東支線のクロスを突破してしまひました。この時、無念な事には、日本軍の主力の追撃が急のため、後方に取残された經理部員三十餘名が、紐の兩端のやうに垂れ下つた敵の兩翼に包圍されて戦死した事を後になつて聞き、一同悲憤の涙にくれました。十九日には龍江驛を占領、つゞいて北大營を戦はずして陥れ、チチハル城へ一番乗りをしました……フン、さうか、修、出來した、く」

『まあ、兄さんがチチハルへ一番乗りを！』

『ほんとうにお手柄でしたねえ』

母親の眼にも美知子の眼にもうれし涙の光つてゐる。

『ほんとうによくやつてくれた、これでこそわしの伴だ』

泰藏老人の聲も喜びにふるえてゐる。

『お父さん、この三日間の激戦で、我軍の最も悩まされたのは、何と言つても零下三十度の寒氣と、糧食の缺乏でした、追撃に次ぐ追撃戦でしたので、後方からの糧食輸送が杜絶えしかも、持つてゐる握り飯や水筒はコッ／＼に凍つて齒も立たない始末でしたから、三日間は完全な絶食状態に置かれました。しかもその上『前進々々』で砲彈の雨を浴び乍ら敵を追撃したのです。何しろマラソン選手も及ばない様な大マラソン競争をやつた譯です。今から考へてもよくまあ體がついたと不思議に思ふ位です。之も大和魂あつてこそですね、私に

は始めて大和魂の存在がハッキリ認識されました。……さうぢや／＼、全く大和魂のお蔭ぢや……三間房を占領して馬軍を壓迫し乍ら猛烈な追撃戦を強行した際等、戦友達は何れもすつかり疲れ切つて、塹壕を掘り乍ら、一寸體を倒すと忽ちグウ／＼大甕を立てゝねてしまふ有様でした。それを戦友が銃臺で引つ叩いては緊張させました。零下三十度の中でうつつかり居眠りすると、すぐ凍傷にやられたり、凍死する危険があるからです。

又第○聯隊の野砲隊が昂々溪附近を前進してゐる途中、ある一人の兵士がふいと見馴れない兵隊が、日本兵と肩を並べて半分コク／＼居眠りし乍ら行軍してゐるのに氣付いて、ハツと思つてよく見ると、馬軍の支那兵だつたさうです。かういふナンセンスが生れる位、三日間は不眠不休の激戦で、敵も味方も無感覺になるほど疲勞し切つたのでした。長谷部旅團が昂々溪の東支線クロスを突破した時には、支那兵とごつちやになつて仲よく行進してゐたさうです。

旅團長が昂々溪の廣場で、ヒョイと気がつくど、周圍にゐるのは味方の騎兵とばかり思つてゐたら、豈圖らんや何れも支那兵だつたので吃驚したといふ話もありません。

何と言つても今度の戦闘で最も敵に大きな損害を與へ、莫大の効果を收めたのは、戦車、装甲自動車、飛行機等の所謂新兵器の活躍です、もしこの新兵器の活動がなかつたら、日本軍は非常な苦戦を経験しなければならなかつたらうと思ひます。……フン、さうぢやらうな、わしが滿洲で戦つた時とはまるで隔世の感があるな、しかし、日本の軍隊もするぶん進歩したもんぢや……又、今度の戦ひで我軍の蒙つた被害で最も大きかつたのは何と言つても凍傷です、一口に凍傷と言つても、零下三十度の凍傷は生やさしいもんぢやありません。凍傷にかゝると、林檎や梨が凍つた時のやうに、骨の芯までズバ／＼に抜け通ります。最初は死人の皮膚のやうに眞白くカチン／＼に凍結してゐますが、二三

日あたりから、その凍結部分が原形の三倍もの大きさで、葡萄酒に腫れ上つて來ます、そしてそれが潰瘍し出すと、骨が腐り出します。

私の戦友に耳が甲州葡萄酒のやうに暗紫色に腫れ上つたのや、手足がブク／＼にふくれ上つたのが澤山ゐます。その手へ鉛筆の芯が折れるほど突き刺して見てもちつとも痛くないさうです……フン、可哀さうぢやな』

『まあ、氣持が悪いわ』

美知子は思はず顔をしかめた。

『修さんは、どうなの、凍傷にかゝつたのでせうか？』

母親が心配さうに急きこんで訊ねた。

『まあ、待て……、今度の戦ひでは兵隊の約半数がこの凍傷にかゝりました』
毎日五六人平均手足を切断しなければならぬ重患者があります。それらの人々は、凍傷で手足を切断される位なら、男らしく一思ひに敵弾に當つて戦死し

た方が増しだといつて口惜しがつてゐます、ほんとうに氣の毒です。然し、幸ひに僕は凍傷にかゝりませんから、どうぞ御安心下さい』

『まあ、よかつたわ』

吻としたやうに美知子と母親が異口同音に言つた。

『一時は食糧でも不自由しましたが、此頃は配給が完備しましたので、何一つ不自由いたしません、防寒具も豊富に供給されてゐますから凍傷にかゝる心配もありません、それに目下はチチハルの南大營といふ立派な支那の兵營に起居してゐます、露營に比べれば逆も贅澤な生活です。それに、近頃、内地から熱し志をこめた慰問袋がドシ／＼送られて配給されます、慰問袋が何よりの楽しみです、中には一人で十袋も貰つて慰問袋大盡になつた兵隊も居ります。馬軍の方は撃退したといふものゝ、まだ敗殘兵が諸方に出没いたしますので、いつ何の方面へ出動を命せられるやら分りません。無聊の日を送つてゐるより戦線

に立つた方が、どれほど愉快か知れません。早く、出動を命せられ、ばいゝなア、と皆で毎日話し合つてゐます。とに角、元氣旺盛で暮して居りますから、御安心下さい。小閑を得たので、久し振りに長々と消息を書きました。この次ぎは、何邊からお便りが出来るでせうか？ では、お父さんもお母さんも、美知ちゃんも宏坊も、體を大切にして元氣よくお暮し下さい。左様なら……ホウ何しろ元氣で何よりちや、この意氣なら何も心配する事はない、皇國のためにしつかりやつてくれ』

『ほんとうに、これで安心しましたわ、丈夫でお國のためにお盡しが出来れば何も言ふ事はありませんわ』

『お父さん、兄ちゃんから何つて言つて來たの？ 張學良の首送つて來た？』

そこへ宏坊が口を出した。

『ハハハ、張學良の首はさう易々と取れないよ、兄さんは滿洲で大働きをし

てゐるよ、飛行機やタンクも大活動してゐるさうだ」

「あゝいゝなあ、坊も行って見たいなあ」

宏坊はサーベルを振廻し乍らチツタタ〜と云つて、座敷中を飛び廻つた一同は思はずドツと笑ひ崩れた。

その時、表の方でチリン〜と慌しい號外の鈴の音がした。號外と聞くと聞き逃せない泰藏老人。

「ソレ、宏坊、號外を買つて來い！」

と、お金を握らした。

宏坊は心得たと許り、矢庭に表へとび出すと、一枚の號外を振り乍ら景氣よく戻つて來た。

父親はいきなり手に取ると、

「何！ 我軍錦州總攻撃開始だつて、しめ〜、さう來なくつちや嘘だ、さあ

宏坊、いよ〜張學良の首をチョン切る時が來たぞ！」

と言ふと、いきなり立上つて、壁に貼つてある滿洲大地圖の錦州のところへ日章旗のついたピンを突き差した。

「お父さん、だつてまだ錦州を占領したんぢやなくつてよ」

美知子がいぶかし乍らさう言ふと、

「何、もう占領したも同然さ！」

とうそぶいて、アハハハ、と哄笑した。

「萬歳々々」

宏坊がうれしがつて、旗を振りかざし乍らはね廻つた。再び明るい哄笑が部屋中に溢れた。

その時、美知子はフト思ひついて、

「あゝ、さう〜、今日は學校で滿洲へ送る慰問品を拵へるのだつたわ、お父

さん、これから行つて来てよくつて？」

と、時計を見上げ乍ら言つた。

「いゝともいゝ、行つてウンと働いて來い、女子供と雖も、この國難の時にブラ／＼してゐては不可ん、兵隊の士氣は後方にある者の援助如何に依るのちやお前達の使命も重いぞ！」

「ハッ、よく分つたのであります」

美知子は兵隊口調で言ふと、舉手の禮をして、クルリと廻れ右をし、スタ／＼と出て行つた。

又もやドツと爆笑、哄笑……

×

×

ヒューヒューと朔北の風が、凍りついた滿洲の曠野の上を吹きすすさんである時折、餓えた野犬の聲が聞える、敗殘兵が打つたのか、或ひは我哨歩が打つた

のか、バリ／＼と銃聲が間斷なくひどく。

しかし、營舎の中はストーブがかん／＼熾つてゐるので、別世界のやうに温い。營舎の窓硝子に一杯に凍りついてゐる氷柱を見るにつけ外の寒さが思はれる。哨兵に立つてゐる戰友の辛さが思ひやられる。

ベットの上で、晝の勤務の疲れで、ぐつたりと死んだやうに眠つてゐる兵もゐる、時々、微笑んだりしてゐるところを見ると、きつと楽しい故國の夢でも見てゐるのだらう。

煙草を喫し乍ら、今日の戦ひの手柄話やお國自慢に花を咲かして賑やかに談笑してゐるグループもゐる。

ラジオの前には、寢そべり乍ら四五人の戰友達が、遙々電波に乗つて聞えてくる『在滿同胞慰問』の演藝放送に聞き惚れてゐる。

さうかと思ふと、一隅では、配給されたばかりの慰問袋を、子供のやうに嬉

しさうに開いてゐる一團がある。

故國の肉親へあてる手紙をせつせと書いてゐる者もある、久し振りのなつかしい便りを笑顔で読み耽つてゐる者もある。一枚の新聞を貪るやうに讀んでゐる者もある。

それらの和やかな情景を薄暗い電燈がぼんやりと照らしてゐる。

その時、サツと入口の扉が開いたかと思ふと、ビューと身を切るやうな寒風が吹き込んで、同時に防寒帽、防寒服にムク／＼と着ぶくれた二人の兵が、銃剣を手にし乍ら入つて來た。

「あゝ、寒む／＼、さア、交代だ／＼」

「やあ御苦勞、さア、此方へ來てあつたれ」

一同は戰友を勞はり乍らストーブの前を開いてやつた。

「やあ、有難う」

二人は防寒服を脱ぐと、吻としたやうすでストーブの前へ胡座を掻いて手をかざした。

その時、ベットのの上に轉がつてゐた他の二人の兵は、元氣よく矢庭に起き上ると、

「ドレ、眠氣がましに一つ涼しい風に吹かれてくるか！」

と、北滿の寒風も物かはといふ元氣で、早速甲斐々々しく武装をとゝのへて營舎を出て行つた。

實にこの意氣、この意氣なればこそ！

「オイ、櫻井、どうだ、今夜は獲物があつたか？」

僚友の一人が、歩哨から歸つた許りの一人の兵に訊ねた。彼こそは、櫻井修であつた。

「いや、今夜はトンと不漁さ！ なア清水」

修は僚友の一人をかへり見た。

「こう不漁だと、歩哨も退屈で困るよ、今夜なんかも便衣隊らしい奴が一匹チラトと影を見せたきりだった、アトは凍死防止の爲めにブラトく歩き廻つてゐた丈さ！」

清水はさう言つてカラ／＼と打笑つた。

「そこへゆくと昨夜は面白かつたせ、匪賊や便衣隊が交る／＼やつて來やがつてね、應接に違なしつて有様だったのでもちつとも退屈しなかつたせ、歩哨もあんまりヒマだとつままないなア」

「全くだよ」

修と清水は無二の親友であり且つ戦友だった。死ぬ時は一緒に死なうと誓ひ合つて、決死隊にも一緒に出願し、歩哨にも一緒に交つたが、運のいゝ點も亦同様で、今まで數次危険な目に逢つたが、一度も負傷一つしたことがなかつた

戦友の歌の文句にある通り「一本の煙草も分け合つて喫ふ」ほどの親しい間だった。二人は又、功名競争を心がけてまるで野球のやうに敵兵一人を討取る事に、スコアをつけて、やれ「三對二だ」とかやれ「五對六だ」とか言つて競争心を煽り合つた。二人にとつては競争は實に愉快きはまるスポーツに他ならなかつた。

そこへ中村といふ僚友がつか／＼とやつて來て、

「オイ、櫻井に清水、さア御褒美をやらう！」

と言つて、いきなり二人の前へ、二つの慰問袋をドシンと投げ出した。まるでおやつにあり付いた子供のやうに二人は争つて慰問袋を取上げた。

「さあ、何が出るかお楽しみ！」

「俺ん所には石鹼が一打ばかりたまつてる、まさか故里へ歸つて化粧品店をやる譯ぢやないから、さう石鹼ばかりは要らねえ、食物だといゝがな」

清水は袋の外からさはつて見て首をひねつた。

「オイ清水、貴様は色が黒いから、特に同情して石鹼ばかり送つてくるんだらう」

一人の僚友がさう彌次つた。

「ばか言へ、この上色が白くなつちやあ女難が恐ろしいや、俺は色男にやなりたくない、それより食氣一方だ」

玉手箱を開けるやうな氣持で開けて見ると、清水のお誂へ通り、中にはチョコレート、パン、羊羹、ウイスキー、キャラメル、煎餅等、甘い辛いを鹽梅よく取交せて入つてゐたので、さア、清水喜んだの何の！

「ヒヤーツ！」

と、思はず奇聲を擧げた。

「オイ〜、又石鹼か！」

一同が早合點してヤンヤと冷かした。

「ノーノー、今度の慰問袋は今迄になく一番氣が利いてゐるぞ、チャンと俺の心を見透した様に欲しいもの許り揃つてある、こうこなくつちや不可ない、こんな慰問袋ならいくつ來たつて困りはしない、先づお毒見と、ウンこれは旨い頬つべたが飛びさうだ、こたえられねえ、東京にゐたつて滅多にくえねえ上等のチョコだせ」

「さうか、ちや俺も一つよこせよ」

修が手を出しかけると、清水はあわてゝ遮ぎつた。

「オットットトト、いくら親友だつてこればかりは別物だ、楽しみに残しておくんだから手をつけちや不可ないよ——して、君の方は一體何だ？」

「俺の方は、罐詰とタオルと猿又と紙よ、何一つ無駄なものはないよ、オヤ手紙が入つてるぞ、子供の手紙らしいな、何だつて、

ガツコウノセンセイニ キキマシタガ センチ ノ ヘイタイサンタチハ
 オクニ ノ タメ ニ レイカ三十ド ノ マンシユウ デ ワルイ シナ
 ジンタチ ト タタカツテ キラツシャル ソウデスガ サゾ タイヘン
 デセウネ ワタクシタチ ガ コウシテ シアハセニ ベンキヨウ シテ
 キラレル ノモ ミンナ ヘイタイサンタチ ノ オカゲ デス サムイ
 マンシユウ ニ センソウヲ シテキル ヘイタイサンタチ ノ コトヲ
 オモフト デット シテキラレマセン マイニチ マイニチ シンブンヲ
 ミナガラ ニホンノヘイタイサンタチ ノ リツバナ ハタラキヲ ハイ
 ケンシテ ヨロコンデ キマス ドウカ ハヤク ワルイ シナジンタチ
 ヲ タイヂシテ ブジ ニ オカヘリ クダサイ コレ ハ ワタクシノ
 オコヅカヒヲ タメテ コシラエタ イモン ブクロデス ツマラナイモ
 ノバカリデ オハヅカシウ ゴザイマス ガ ドウゾ オウケトリ クダサ

イ。

讀み乍ら修の聲は段々ふるえて來た。

傍らの者も、いつか臉に一杯熱い涙をたゝえて、おつと、聞いてゐた。

「オイ、嬉しいぢやないか、こうした熱心な後援者があればこそ我々日本軍は強いんだぞ、そこへ行くと支那兵なんか惨めなものだなあ」

修は軍服の袖で涙を振拂つて、潤み聲でさう言つた。

「全くだよ、こういふ手紙を讀まされると、勝たなくつちや、死んでも死に切れないなあ」

「大いにやらうぜ」

修は小學生の手紙を恭しく押戴いてから、軍服の胸を披いてシャツのポケットの奥深く藏つた。

「勿體ないからこうして肌身はなさず持つてゐるんだ、こんないゝお守りはな

いせ！　ところで、清水、貴様の所へそんな結構なプレゼントをしたのは一體誰だ！

「ウン、さう〜、お禮状を出さなくつちや——」

清水はあわて、気が付いて、慰問袋の中を探し廻つた。

やつこの事で底の方から一通の手紙が現はれた。しかも、それはピンク色の小封筒で、表には「戦地の兵隊さんへ」とペンの跡もやさしく記されてある。一見して、それは若い女性の手紙に直感された。女氣皆無の陣中にあつては正しくそれは異常な大センサーションを喚起した。

ワーツと許り一同は喚聲をあげて清水目がけて突撃した。

「オイ、清水奢れ〜、貴様今日は馬鹿に運がいゝぞ、その手紙さへあればもう菓子なんかいるまい、さア、みんなでこの菓子を占據して喰つちまはうせ」
「馬鹿止せ〜、この菓子を分捕られて堪るもんか！」

清水は必死になつて慰問袋を擁護した。

「ハハ、命より大切と見へるな、ちや可哀さうだから、まあ見逃してやらう、その代り、その手紙を皆の前で朗讀するんだ」

「賛成！　賛成！！」

かうなると、清水も否應なしだ。

「よし〜、ちや、讀んで聞かせてやる、謹んで拜聴しろよ、え〜と、エツヘン、エツヘン、エツヘン……」

「オイ、焦らすなよ」

「先づ威儀を正してからぢやないと罰が當る、ちや讀むぞ……、寒い〜滿洲で我が生命線を守つてゐらしやる我が忠勇なる軍人様、聞けば戦地は霧下三十分どか、妾達には到底想像の出来ない寒さでございます、故國でこうして平和に暮らしてゐる妾達も、暴虐な兵賊や酷烈な寒氣に惱まされてゐるあなた様達

の事を思ふと、心から熱い〜同情と感謝を覚えるのでございます」

「ヒヤヒヤ！」

「冷かすのなら、もう讀まんぞ」

「いや、謹聽してるんだ。さあ讀んだ〜」

「その同情の萬分の一のあらはれとも思つて今度、妾達の學校で、慰問袋をどのへて戦地の皆様へ差上げることになりました。どうぞ妾達の心をお汲み取りの上、暴虐な支那軍を打破つて、永久の東洋平和の確立に御努力下さいませ。妾の兄も實は戦地へ參つて居りますので、皆様に對する御同情は一入熱いつもりでございます。……これでおしまひだ」

「フン仲々名文だ、字も水莖の跡いと麗はしい、きつと才色兼備の才媛だらう手紙を見た丈でも判る。オイ、ところで一體名前は何といふんだい？」

「名前か！」

清水は逡巡して、何となく溢つた。どうも名前まで公表したくないらしいそれと見ると一同は面白半分には。

「オイ〜、名前を聞かせなくつちや、龍を描いて眼を入れないやうなもんだせ。さア見せろ〜」

と、手紙を引つたくりかねまじい勢ひ。これには辟易して、清水も遂に兜を脱いだ。

「よし、ちや、知らしてやる、知らしてやるから手なんか出すな、——え〜と東京旭榮女學校第三學年A組……」

と、言ひかけると、修がハツとしたやうに顔を上げて大きく眼を瞠つた。

「オイ、焦らすなよ、それから何といふんだ、名前は？」

「名前は、櫻井、オイ、君と同じ名前だせ、これは不思議だ」
と清水も驚いた。

「櫻井なんと言ふんだ」

「櫻井美知子つてのさ！」

「なに！ 美知子！ そりや俺の妹だ！」

「何、君の妹！」 清水が眼をまん圓くした。

「な、な、なんだつて、櫻井の妹だつて！」

一同もあまりの意外に啞然とした。

「俺の妹の慰問袋が君ん所へ來るとは全く不思議な縁だなア、世の中は廣いやうで狭いよ」

「さうか、それは〜……」

一同も修の妹だと知れると、さう冗談も言へないのだつた。

しかし、飄輕者と知られてゐる小川一等兵丈は、遠慮なくズバリと訊ねた。

「オイ、君の妹はいくつだ？」

「十七だよ」

「さうか、さぞ美人だらうな？」

「なに、まだから子供だよ」

「俺も妹が欲しいなア？」

清水は、その小川の質問が、自分の訊ねたいと思つてゐる事を彼が代つて訊ねてくれたやうに思はれて嬉しかった。彼の顔は何となくポーツと赤く頬照るのをおぼえた。それは、強ちストロブの傍にゐたせいばかりではないらしい。そして彼はてれ隠しのやうに、

「いや、君の妹さんとは夢にも思はなかつたよ。手紙を出すついでがあつたら熱く御禮を言つておいてくれ給へ」

「あゝ、よし〜」

修は簡單にうなづいた。他の僚友達もそれつきり今の話は打忘れたやうに、

次から次へと賑やかに談笑に花を咲かせて行つた。

——が、只一人、清水の胸には未だ見ぬ「櫻井美知子」の映像が、烙きついたやうに残されて、容易に消え去らうともしないのだつた。

夜は大分更けた。

野犬の吠へる聲が聞へる。

ボン、ボンと時折銃の音が銜する。

窓硝子をはた／＼ゆすぶつて風が吹きすぎる。

トツト、トテチト、トテチテター

——その時、突如！ 静寂を破つて喇叭の音がひびき渡つた。

正しくそれは非常召集の喇叭！

全員は感電したやうに、思はず全神経をビリリと敬て、吾先きに立上つてバタ／＼と武装に取りかかつた。

今までの和やかな空気は何邊へやら、忽ち緊張した戦時気分が漲つた。

ところへ、扉をサツと開けて傳令兵が、鐵帽、防寒服、銃剣を手にした物々しい姿を現はして叱咤するやうに傳令を傳へた。

「只今、〇〇中隊よりの急報！ 小興屯に兵賊約五百突如襲撃して危険に瀕しつつあり、即刻救援に赴く可し、報告終り」

「報先承知した」

傳令兵はすぐ取つて返して闇の中へ姿を消した。

平素の訓練が行届いてゐる丈に、部隊の武装は敏捷に瞬く間に整つた。

最早何事も一切打忘れ、渾身只これ忠勇の権化と化した。全員は無言の中にズラツと朝風吹きまくる營舎外に整列した。

「番號」隊長が低い聲で號令をかける。

全員異常なしと認めると、ザク／＼／＼と杖を啣んで肅々として、深夜

の廣野を行進始めた。

ビュー〜と風は相變らずあれ狂ふ。

ババンバン……と、廣野の涯でしきりに銃聲がする。

『それ駆足！』

全員は小興屯目差してまつしぐらに突撃を開始した。

x

皇軍の到るところにして、靡かぬ草もなく、北滿に跳梁した兵賊共も遂にその影を潜めた。滿蒙三千萬の蒼生は。こゝに初めて軍閥の苛斂誅求より脱して生色を呈し、理想の樂土建設の氣運は動き出した。

飽くまで正義の發動に依つて行動した我軍は、北滿の治安その緒につくと見ると、出動した部隊は何れも、奉天へ歸還した。

赫々たる殊勳を樹てた多門師團は、沸くやうな歡呼に迎へられて奉天へ戻つ

た。

しかし、滿蒙擾亂の原兇、惡軍閥の首魁たる張學良は、まだ錦州に頑張つて隘險な奸手段を弄しては、我軍を惱ました。

學良の放つた便衣隊や馬賊に化した正規兵等は到るところに出没して、小賢しくも皇綱に及向つた。

こゝに於て本庄司令官は、滿蒙擾亂の策謀根據たる錦州の學良軍を斷然膺懲して禍根を絶す可く意を決し、奮然起つた。

先に北滿に於て未曾有の大激戦を演じて馬占山軍を粉碎した光輝赫々たる長谷部旅團も、いよ〜錦州へ進撃する事となつた。

『オイ、いよ〜錦州攻撃が始まるさうだぞ！』

逸早くその報を聞いた僚友の一人が、修達の營舎へあわたとしく駆け込んで來て注進した。

ベッドで午睡をしてゐた者、手紙を書いてゐた者、談笑してゐた者、何れもその聲を聞くと、一齊に總立ちになつた。

「オイ、小杉、それはほんとうか？」

「ほんとうにもなんにも、旅團長閣下が既に前線へ命令を發せられたさうだ」

「さうと聞いちやあ、ちつとしてゐられない、俺は腕がウヅ／＼して困つてゐる所だ、早く出動命令が下ればいゝがなア」

「全くなア、錦州城一番乗りは何とかして俸達の隊でやりたいもんだがなア」

「一體、いつ出動命令が下るんだらう、さう聞くと待遠しくつて寢ても眠られないよ」

「何、もう少しの辛抱だ、その時こそうんとやつてやりまくらう」

「さうとも／＼、萬才萬才！」

意氣既に敵を呑む慨、兵士達は一齊に歡呼を擧げた。勿論、修もその中の一

人だつた。

興奮がやゝしづまつて、フト氣が付く、修は、こんな時には、いつも自分の傍にゐて眞先に有頂天になつて喜ぶ筈の清水がゐないのに氣がついた。

はて、勤務中かしら、と思つたが、そんな筈はなかつた。

修は營舎中を隈なく見渡したが、不思議にも清水の姿はどこにも見えない。

(一體どうしたんだらう)

と思つて、營舎を出て酒保の食堂を覗いて見た。食堂はガランとしてゐたがフト見ると隅の方の食卓に一人の兵が、俯伏してゐるのが目に止つた。

誰だらう？ と怪しみ乍ら、そつと近づいて見ると、それは意外にも清水だつた。

清水は彼の近寄つたのとも氣附かず、肩をかすかにブル／＼とふるわせてゐるのだつた。

「奴、さては泣いてゐるのだな？」

と直感すると、修は裏切られた様な憤りがカツと胸底からこみ上げるのを覺へた。

「オイ、清水、何をしてゐる！」

修がいきなり清水の肩へ手をかけると、清水はハツとして顔を上げた。果して、清水の眼は赤く泣き腫れてゐた。

(此奴、こんな卑怯者とは思はなかつた、すつかり見損なつた)

修は自分の豫感の適中したのがむしろ悲しかつた。

そして、こみ上げる憤りを押へて、努めてやさしく言つたつもりだつたが、その聲はふるへを帯びてゐた。

「オイ、清水、喜べ、いよいよ貴様の望んでゐた錦州攻撃が始まるさうだぞ！
皆がさつきから喜んでゐるあの騒ぎが聞えなかつたのか！」

「……………」

いつもの清水なら飛立つばかりにして喜ぶ筈だつたが、不思議にも今日の彼は、まるで無關心のやうに冷靜だつた。むしろ、別人のやうだつた。

修の憤激は加速度に募つた。そして、いきなり、言葉荒々しく呶鳴りつけた

「オイ、清水、貴様、泣いてゐたな、俵は貴様がそんな臆病者とは夢にも思はなかつた。俺はすつかり貴様を見損つた、そんな女々しい奴とは、今日限り絶交だ!!」

言ひすてるなり、そのまゝ踵を返して室を出ようとする、清水はいきなり修の腕を捉へて引止めた。

「えゝつ、放せ！」

振切つて出ようとする、清水は、

「櫻井、君は、誤解してゐるんだ、まあ、この手紙を見てくれ」

と言つて、修の前へ一枚の巻紙を差出した。

巻紙には辿々しい女の手續で認められて、しかもところ／＼に涙で滲んでゐた。

「何だい、それは！」

修は汚はしいもののやうに、チラツと一瞥したきり手に取らうともしなかつた。

「まあ、読んでくれ」

清水は哀願するやうな眼差で見上げた。

何やら意味あり氣な様子なので、修は澁々手に取つて目を落した。

——と、それは意外にも清水の老母から來た手紙なのだった。

茂雄、體は丈夫ですか？ お母さんは近所の人達から、戦争の話を聞いた
びにお前も蔭でさぞ立派な働きをしてゐてくれる事だらうと思つてゐます

ほんとうに日本の軍人として恥かしくない働きをして下さい。お母さんの
何よりの心が、りは只それだけです。——それから之は、お前が心配する
といけないから、決して知らすまいと思つてゐたのですが、いつどんな事
があるかも知れないその時にお前に力落しさせては、尙更よくないと思ひ
ますので、思ひ切つて知らせますが、妾は、この頃、ずつと體が悪くて臥
つて居ります。お醫者さんの話では、何でも心臓が悪いとの事です、何し
ろこの年のことゆえ、いつどんな事があるか知れませんが、妾もそれはもう
チャンと覺悟してゐます、萬が一の事があつてもお前は決して力落しをし
てはいけません、妾の事等は心配せずお國のために働いて下さい。之が何
よりの妾の願ひです、近所の人達も代る／＼來て親切にお世話して下さい
いますのでちつとも不自由はありません、町内の係りの人のお世話でお醫
者様にもかゝつてゐます、どうか妾の事は少しも心配しないで下さい、便

りも、もうこれつきり出来ないかも知れないが、案じないで下さい、妾なんかもうないものと思つて、心を鈍らせずお國のために精一杯働いて下さい。この母は例へ何邊へ行つてもお前が目ざましい手柄をたて、下さるのを何よりの楽しみとして待つてゐます。ではくれぐれも体を大切にして下さい。

母より

茂雄どの

修の目には見る／＼涙がいつぱい溜つた、文字が涙に滲んで見えなくなつた。漸に読み終はると修は、いきなり清水の手を轟と握つて、

「清水、許してくれ、俺はやつぱり誤解してゐた、君のお母さんは實に偉い、こうした賢いお母さんを持つた君は幸福だ、僕は羨しい、君の胸の裡もよく判つた、何で之が泣かずにゐられよう、俺もすつかり貰ひ泣きをしてしまつたよ」

修は赤い目をしばた／＼き乍ら感激し切つた語調で言つた。

清水は嬉しさうにやつと顔を上げて決然として言つた。

「有難う、君なればこそだ、よく判つてくれた、僕は母の事なんかもう諦めて勇敢に戦線へ向ふよ、そして軍人としての最善を盡すよ、今の僕にとつては、それが母に對する最後の孝養なんだ！」

「さうだ、君としては、さうするよりか他に途はない、——然し、お母さんは氣の毒だなア、何とかしてもつと君を安心させる方法がないものか知ら、——待ち給へ」

修は腕を拱いて沈思熟考した。

やゝ暫くして、修は何思ひついてか、ハタと手を打つて、顔を明るく輝かせた。

「オイ、清水、かうしちやどうだらう」

「何？」

「君の所へいつぞや慰問袋を送つて来た僕の妹の美知子な、彼奴はどうせ閑な體なんだから、僕から言付けて、君のお母さんの世話を一切させたらどうだらう」

「君の妹さんを——そ、そんな事！」

「何、構はないよ、君さへ異存がなければ？」

「勿論、僕は——」

「ちや、さう決めよう」

「それちや、僕、あんまり心苦しいなあ」

「何、そんな遠慮はあるもんか！ 善は急げ、早速今日手紙を出しておかう」

「さうかい、ちや、さうして貰ふことにしようか、さうすりや僕も安心して働けると言ふもんだ」

清水は吻と救はれた様に急に晴々しい顔になつた。そして、いきなり立上る

「櫻井、感謝するよ！」

と言つて堅く／＼手を握つた。

二人は涙ぐんだ瞳と瞳でちつと見交はした。燃え上るやうな新しい友情が二人の胸に交流した。

その時、營舎の方から、

過ぎし日露の戦ひに

勇士の骨を埋めたる

忠靈塔を仰ぎ見よ

赤き血潮に色染めし

夕陽を浴びて空高く

千里廣野にそびえたり

と、戦友達一同の勇壯に合唱する滿洲行進曲か聞えて來た。

二人はフト氣がついて顔見合はすとニコツと笑つて、

『さあ、皆の方へ行かう』

と、互に手を組んで、大聲で歌ひ乍ら營舎の方へ走り去つた。

X

清水茂雄の老母は本所の端れの、とある貧しい裏長屋の一軒に痛み臥してゐた。唯一の働き手である茂雄が滿洲へ出征してからといふものは、近所の人々の同情によつて辛ふじて命をつないでゐた。

ところが、此頃になつて思ひがけない温い同情者が現はれた。老母にとつては實に救ひの神であつた。その神はいとも優しい女神だつた、言ふ迄もなくそれは櫻井修の妹、美知子だつた。

美知子は戦地の兄から、清水茂雄の老母が病んでゐるとの事故、出来る丈お世話して上げるとの手紙を受取る、更ぬだに純情の心の持主の彼女は、深く同情し、早速その旨を父母に相談した。元より両親は双手をあげて大賛成、いろ／＼の見舞品を調へてくれた。

美知子が老母の病床を見舞ふと、果して彼女は涙をたゝえて打喜んで感謝した。修と茂雄が兄弟の様に仲のいゝ友達であること、美知子の慰問袋が偶然、茂雄の手に渡つた事等を話し合つて、二人は不思議な宿縁に驚いた。

それからといふもの、美知子は一日として欠かさず學校が退けると、すぐ老母の家を見舞つて、いろ／＼温い慰めの言葉をかけたり、薬餌の世話をしたり、洗濯掃除をしたり、至り盡せりの親切さで面倒を見た。

それは親身の娘も及ばぬ程の行爲であつた。近所の人々もそれを見ては誰一人感心せぬものもなかつた。

——今日しも、美知子はいそ／＼として老母の家を訪ねて来た。

『小母さん、今日は？ お加減は如何が？』

美知子が枕許に坐ると、スヤ／＼まどろんでゐた老母はばつちりと眼を開いて、

『オヤ、美知子さん、又来て下さいましたの、毎日ほんとうにすみませんね、何と御禮を申上げてよいやら分りません』

と、早くも涙ぐんだ。

『いゝえ、小母さん、そんな事何でもありませんわ、それより、早く快くなつて、茂雄さんを安心させて上げて下さいまし』

『有難うございます、美知子さんが来て下さるやうになつてからだん／＼快くなつて参りました、一時はもう諦めてゐたのですが、これも、みんな、美知子さんのお蔭です、この御恩は決して忘れません』

『あら！ そんなにお禮を言はれると妾困つてしまふあ、——あゝ、さう／＼今日は綺麗な花を買つて参りましたの』

美知子は、いそ／＼と立上ると、臺所から空瓶を持つて来て、バラピン紙に包んであつたスカートビートを瓶に差して、老母の枕許へ置いた。

『まあ、綺麗ですこと！ すみませんね』

老母は満足さうに沁々と眺めた。

美知子は更に風呂敷包みを解いて菓子折を取出して進めた。

『小母さん、これ少しばかりですが……カステラなら召上れませう』

『まあ、そんな事なさつて困りますね』
老母はすつかり恐縮した。

『オホ、……小母さんのやうにそんなに遠慮なさるもんぢやございませんわ』
美知子は朗かに笑つた。

「いゝえ、ほんとに度々頂くばかりで……、不思議な御縁がもてこんなお世話になりましたねえ」

「いゝえ、そんな事ありませんわ、小母さんの息子さんはお國の爲に命を投げ出して働いてゐらつしやるのですから、留守を守る妾達が小母さんにお盡しするの當り前の事ですわ、これ位のことではまだく足りないと妾思つてゐますの」

「えッ、とんでもない、せめてこのお禮として伴が立派な働きをしてくれればいゝがとそればかり思つてゐます」

「大丈夫よ、小母さん、茂雄さんはきつと立派なお手柄をお立てになるに違ひありませんわ」

「まあ、美知子さんのお兄様がついてゐて下さるので、どうやらお兄さんの後からついて行つてお手柄のお裾分けをして頂く事が出来るかも知れません」

「いゝえ、家の兄さんこそ茂雄さんのお裾分けをして頂くのよ」

「とんでもない！——美知子さん、お兄さんから、この頃お便りがありました？……」

「忙しいと見えて滅多にありませんの、茂雄さんからは？」

「家の奴もですの、何だか又大きな戦争が始るさうですね」

「え、錦州を攻撃するんださうですの、それで忙しくつてきつと手紙を書く暇もないのでせう」

「何しろ、しつかりやつてくれるとようござんすがね、妾、手紙が書けさうもありませんから、もしお兄さんに手紙をお出しになる時には、お序にくれぐも宜しくお傳へ下さいまし」

「え、茂雄さんにもお傳へするやうに書いて置きますわ、——あつ、すつかり忘れてゐましたが、何か召上るのでしたら妾拵へますわ、小母さん、何召

上つて?』

『いゝえ、先刻御近所の方に仕度をして頂きましたから結構ですの』

『さう、妾が致しましたのに……、お薬はまだございまして? なかつたら頂いて参りませう』

『え、有難うございます、まだございますから……』

『アラ、小母さん、ちや、何にも妾のする事がないぢやないの……』

美知子は張合ななさうに笑つた。

『いゝえ、これ丈して頂けば充分でございます』

しばらくして、美知子は更つた様に口を切つた。

『小母さん、實は今日は、御相談があつて上つたのよ』

『ハイ、何でございます?』

美知子は一寸躊躇してから、

『あの、小母さん、妾の家へお引越しにならない? 實は家に兄さんがゐなく

なつてからお室が明いてゐるし、人數も少くなつて淋しいから、もし小母さんに來て頂けたら、お話し相手も出來て賑かになつて大變都合がいゝから、一つお願ひして見たらと、お父さんやお母さんが仰言つたの……、さうしたら、妾も始終小母さんのお傍にゐてお世話が出来る譯ですもの……』

『まあ! だつて、そんな事御迷惑ですわ、どうぞこれ丈お世話になりますればもう充分ですから、この上何も御心配下らないやうに、仰言つて下さいまし』

『アラ、ちつとも迷惑なんかにならないわ、しかし、もし小母さんの方で御迷惑だつたら悪いわね』

『ど、と こんでもない!』

『それぢや、ゐらつしやいよ、ね、ね、小母さん!』

『いえ〜、この上お世話になるのはどうしても心苦しいございますから、このまゝにしておいて頂きませう』

『アラ、そんな事意味ないわ、御迷惑でさへなかつたらほんとうにあらしつて下さいよ』

『さア、困りましたね、お嬢さん』

『ちつとも困ることなんかないわ、妾、小母さんに承知して頂けないと、家へ歸つて迎もお父さんに叱られるから、妾こそほんとうに困つてよ』

『まあ、御冗談仰言つて……』

『いゝえ小母さん、ほんとうよ、だから承知して頂戴、ねえ、小母さん、いゝでせう！』

『ぢや、お嬢さんにお任せいたしませうよ』

『まあ、うれしい！ ぢや、小母さん、明日の朝自動車でお迎へに上つてよ、

その時になつて氣が變つちや駄目よ、堅く約束してよ』

『お嬢さん、自動車なんて勿體なうございます』

『オホツツ、自動車だつて圓タクよ、何も仕度なんかなくてもいゝのよ、妾が来てみんな上げてますから……、ぢやあ、妾、これから家へ歸つて、お父さんやお母さんを喜ばして上げるわ、ぢや、小母さん、左様なら、お大切に……』

小鳥の様に快活にふるまつて美知子はいそ〜と立上つた。

(何といふ明るい娘さんだらう！)

老母はすつかり朗らかになつて、微笑み乍ら、美知子の後姿を見送つてゐた。

(もし、あんな娘さんを茂雄の嫁に迎へられたら……)

ふと、こんな考へが泛んだが、(滅相もない！)とあわてゝ、否定した。

X

ダクダクダク………と機關銃が鳴る。
迫撃砲が天地を震撼して發射される。
兵賊の陣地たる丘陵の横つ腹に見事命中して、轟然、炸裂したかと思ふと、
天に沖する土煙と黒煙が巻き上る。
蟻の散るやうに敵兵が散る。

『ソレ、突撃！』

味方は銃剣を揃へて一齊に塹壕から跳り出て、まつしぐらに突撃した。
進軍喇叭が壯烈に鳴り渡る。
が、敵も去る者、第二の陣地を死守して頑強に抵抗しはじめた。
ビュー、ビュー……と、銃丸、機關銃彈が文字通り雨霰と降りかゝる。
止むなく味方は一時伏せになつて盛んに應戦する。

修のすぐ傍には茂雄が伏せをして、矢繼早に彈丸をこめては、引金を引いて
ゐる。

身邊にはバラ／＼と敵彈が注ぐ。時折、カチンと鐵帽を掠めてゆく奴もある
ヒョッコリ丘の上の敵陣へ一人の敵兵が頭を出した。

『べた！』

修は照準をつけてグイと引金を引いた。

ビュッ！ 見事、命中！ 敵兵はもんどり打つてころ／＼と轉落した。

『やつたな！』

それを見て、清水が口惜しさうに呟いた。

『一對零だぞ！』

修は得意氣にニヤリと笑つた。

清水は焦つて滅茶苦茶に亂射を浴びせかけた。しばしは耳も聳せんばかり、

いんくたる銃聲、砲聲だ。

風に砲煙が途切れたと思ふとチラと敵の陣地が見えた。一人の敵兵が望遠鏡をかざして立つてゐるのを逸早く見付けた清水は、待つてましたと許り、グイと引金を引いた。

同時に、敵兵はのけぞり返つて、塹壕の中へ落ちて行つた。

「萬才！ 一對一だぞ!!!」

清水が歡聲を上げた。

その時、突如！ 後ろの方からバチ／＼と猛烈な銃聲が起つた。

いつの間にか、兵賊の一部隊が後方へ迂回して、味方を挾撃しようとする企てたのだつた。

「それ、包圍されたぞ！ 全員は協力して包圍を切抜けて一先づ打虎山へ後退しろ！」

指揮の岡村少尉が、指揮刀を振かざし乍ら悲痛さうに叫んだ。

銃聲は、いよ／＼激しくなる許りだ。

一間走つては地に伏し、又一間走しては地に伏し、その間絶えず猛烈に應射しつゝけた。

「あつ！ やられた！」

突如！ うしろで叫び聲がした。

振返へると、岡村少尉が肩を朱に染めて折れ崩れるやうに倒れた。

修はあはて、走り寄つて抱えて、

「少尉殿、傷は浅いですが、しつかりして下さい！」

「俺には構ふな、櫻井、お前は早く本隊へ戻つて援兵を頼んでくれ」

少尉は喘ぎ／＼さう命じた。

「承知しました、ともあれ、少尉殿、私の肩へお頼り下さい」

修は少尉を背中に背負ひ上げると、ピュー／＼と敵弾の飛來する中を、頭をこゝめ乍ら一散に、味方の陣地の方へ走り出した。

どこをどう走つたのか全で氣がつかかなかつた。ふと、氣がつくと、いつの間にか、戦友達にはぐれてゐた。

背中に背負つてゐる少尉の體がばかに重くなつて息苦しかつた。

銃聲は相變らず豆を煎るやうに聞へる。

砲弾穴を飛びこへたり、敵兵の屍體を乗り越へたりして、約一里程歩きつゞけて、漸く打虎山の本隊へ辿りついた時には吻とした。

修はいきなり衛生隊の天幕の中へとび込んだ。

「岡村少尉殿が負傷されました、早く手當をして上げて下さい」

喘ぎ／＼言つて、擔架の上へ少尉の體を下すと、急にぐつたり疲れが出た。軍醫達はすぐ少尉の創を點檢したが、絶望的に、

「折角ぢやが、もう手遅れぢや」

「だつて、だつて……」

修にはどうしても信じられなかつたので、鸚鵡返しにさう言つた。

「こゝを見い、後頭部をやられてゐる、これが致命傷だ！」

その創は少しも氣付かなかつたが恐らくそれは背負つてくる途中流弾が命中したものでらしい。

修は折角の努力も水泡に歸したかと思ふと落膽して、總身の力が一時に脱けるやうな氣がした。

が、その時ント重大な使命を帯びてゐることを自覺すると、かうしてはゐられないと、一目散にそこを飛び出して本隊へ向つた。

本隊では修の復命によつて、直ちに精銳な部隊が馬蹄の音も勇ましく疾風の如く出動した。

修は憂鬱だつた、慈父の如く慕つてゐた小隊長の岡村少尉は戦死されてしま
うし、残して来た僚友達の身の上は氣遣はれるし、いつそこのまゝ戦線へ戻つ
て、斬つて〜斬り捲つて花々しく戦死してしまひたいと思つたが、交代を命
ぜられてゐるので、自由に行動もどれなかつた。

營舎へ戻つて、修が悄然としてゐると、

「オイ、櫻井、どうした？」

と、ボンと肩を叩いた者がある。

見ると鈴木伍長だ。

「小隊長殿が戦死されたさうだな、残念な事をしたな、貴様もさぞがっかりし
たろ」

「ハイ、残念であります」

修の眼からはハラ〜と涙が迸つた。

「この恨みは屹度きつと霽らしてやる、何霽らさすには措くものか！」

鈴木伍長は悲痛な語調で決然として呟いた。そしてそのまゝ踵を返さうとし
たが、フト思ひついた様に又振り返つて、

「さう〜、櫻井、貴様の所へ手紙が来て居つたぞ！」

「ハイ、さうでありますか？」

いつもなら飛立つばかり嬉しい故國からの便りも、今日に限つては一向嬉し
くなかつた。

が、ともあれ、通信班へ行つて手紙を受取つて見た、それは妹の美知子か
らだつた。

彼は封を切つて読み乍ら歩いた。

兄さん、いよ〜錦州攻撃が始まるさうですね、いよ〜お兄さんの御活
躍振りが拜見出来るといふので、お父さん初めみんな大へん期待して居り

ます、どうぞしつかりやつて下さい。
 ところでお兄さんや茂雄さんを吃驚させるニュースがあつてよ、それは清水の小母さんが家へ引越してゐらしたのよ、妾、あれから清水さんのお母さんの所へは妾毎日上つてお世話由上げて居りましたが、大へん快くおなりになりました處がお父さんも大へんお氣の毒にお思ひになりました、家も室が明いてゐるし、家族も少いしするから、もし此方へ来て頂けたらお話相手になつて大變都合がよいから、お前一つお話しして、お差支へがなかつたら来て頂いたらいいだらうとの事でしたので、妾も大喜びで、早速お訪ねしてお話しいたしますと小母さんは初め遠慮して辭退されましたが妾が熱心にお勧めいたしましたので、一昨日、私の宅へお引越しになりました。これで、一層お世話するにもよく手が届いて、お世話し甲斐があるといふものです。

ですから家は逆も賑やかにになりました、毎日集つては、兄さんや茂雄さんのお噂をしてゐます。又、宏坊がすっかり小母さんになつてしまつて、『小母ちゃん』と言つてちつとも傍をはなれませんか。お兄さん實に意外でせう。茂雄さんをびつくりさせて上げて頂戴よ。ではお二人ともお體を大切にして、しつかりお國のために働き下さい
 読み終つて、修はにつこり笑ひ乍ら、

『フーン、そいつは全く意外だ、よし一つ清水をびつくりさせてやらう、彼奴も之で安心して働けるだらう』
 と、呟いて、急いで營舎へ戻つた。

しかし、未だ救援隊も僚友達も戻つて来てゐなかつた。
 一刻も早く清水にこの事を知らせてやつたいと思ふと、待ち遠しくても立つてもゐられない氣がした。

待ち焦れてゐた救援隊と僚友達が歸つて來たのは、夕刻の五時近くであつた。修は戦線の方から憂々と蹄の音が聞へてくると、逸早く營舎を飛び出した。果してそれは救援隊だつた。修は双手を振上げ、歡呼し乍ら迎へた。

救援隊に危地から救ひ出された僚友達の無事な姿を見ると、眼頭の熱くなるのを覺えた。何れも傷を負つたり血潮を浴びたりして、如何に激戦であつたかといふ事をまざまざに語つてゐるのでした。

『よう、櫻井、無事だつたか』

『おう、君も無事だつたか』

修は同じ隊の戦友達と一々なつかしげに聲をかけ合つた。

が、どうした譯か、清水の姿が見えない、修の胸には次第に不安の影が濃くなつて來た。

たまりかねて、修はいきなり一人の戦友の傍へつか／＼と寄つて訊ねた。

『清水はどうした？』

『うん、清水と他三名は激戦中はぐれて行方不明になつてしまつた、引揚げる時搜索したがどうしても分らない、明日の朝更めて搜索隊を出す事になつてゐる、殊によつたらやられたんぢやないか知ら？』

戦友は不安さうに答へた。

『何、やられた？』

やられるとしたら母親の事を知らせて安心させてからにしたかつた。といふ痛恨が修の心を強くしめつけた。

(清水、どうか生きてゐてくれ！)

(死ぬ時には一緒に堅く誓ひ合つた俺達ぢやないか！ お前一人で死ぬといふ法はないぞ！)

彼はさう胸の裡で呟いた。修には、どうしても、清水が死んだとは思はれな

かつた。

（さうだ、若し、今夜中に清水が戻つて來なかつたら、明日の朝は搜索隊を志願して清水を探しに行かう！）

さう心を決めて彼は營舎へとぼくと戻つた。

その夜はまんぢりとして、落々眠れなかつた。夜が明けた、然し期待は空しく依然清水は戻つて來なかつた。

修は早速中隊長の所へ行つて、熱心に搜索隊に加へてくれるやうにと歎願した。

中隊長は修の熱意に感動して、遂に彼の搜索隊へ加はる事を許した。

修は勇躍狂喜した。

隊搜索は修と共に十名が撰拔されて任命された。

何れも決死の悲壯な決心だつた。

「もし、俺達がやられたら死骸を拾つてくれ」

「よし引受けた、しつかりやつてくれ」

一同は僚友達に勵まされて、意氣揚々まだ明けやらぬ曉の霧を衝いて出發した。

丁度霧が煙幕代りになつて好都合だつた。

心急かかれつ、忽ち一行は昨日の激戦の現場へ到着した。敵兵の屍体が點々と轉がつてゐる。到るところに大きな砲弾穴が穿たれてゐる。

修は狂はし氣に、何邊かに清水が仆れてゐはしまいかと、懸命に八方へ目を配り乍ら探し廻つた。

「オーイ、清水！ 清水！！」

我知らずさう呼ばはる聲が咽をついて出かゝつたが、ハツと氣が付いて抑えた。聲を出せば敵兵に發見される恐れがあるからだ。

十名の兵は八方へ手を配けて、戰場を隈なく捜査した。

修も血眼になつて駈けずり廻つたが、清水の姿を見出す事は出来なかつた。

その時、向ふの高梁畑の中から、告田一等兵がしきりに手を振つて、何やら合圖した。

さては發見されたか！と思つて、修は砲弾穴を飛び越へてころがるやうに一散にかけつけた。

「オイ、見付かつたか？」

息を弾ませて訊ねると、

「高梨と平川の死体が見付かつた、どうだ、悲壯な最期ぢやないか、飽くまでやつたらしいな」

と言つて、吉田は指さした。見ると、全身蜂の巢のやうに銃弾を浴びて朱に染んでゐる二戦友の死体が寄添ひ乍ら折倒れてゐるのだつた。

「オイ、高梨！ 平川！」

感極つて修はいきなり二人の死体に取違つた。

「立派な最期だなア！」

吉田も満眼に涙をたゝえて概然と吐いた。

「それはさうと、清水と桂はどうしたらう？」

「ウン、どうしても見付からん、オメ〜捕虜になるやうな二人ぢやないから何處へ隠れてゐるのかも知れん、それとも野戦病院へでも送られてゐるかな」

「多分、俺もそんなこつたらうと思ふ、とに角、もつと探して見よう」

それから二三時間に亘つて、根かぎり探し廻つたが、依然として二人の行方は知れない。

それ〜違つた方面を探し廻つてゐた兵も、失望の容子ですご〜戻つて來た。やはり何等得るところはなかつたのである。

その中に段々霧が霽れて来た。霧が霽れると何しろすぐ敵陣の真近かので忽ち一行の姿が発見される恐れがあつた。

「もう之以上探し様がない、この上るては危険だ、残念乍ら一先づ引揚げるとしよう」

「ウン、引上げよう」

二人の兵が、高梨と平川の屍体を背負つて八人の兵がそれを擁護し乍ら引上げにかゝつた、言ひ様のない悲痛な氣持にとざされて、誰一人口を利くものもなく、黙々と歩きつゞけた。

霧が霽れて、朝日がカツとさして来た。

ものゝ五六町と来た頃であらうか!!

突如、バチバチ〜〜〜といふ銃聲がうしろから起つたかと思ふと、ビュー〜と弾丸が一行を掠めて落下して土煙りを立てた。

「ソレ、敵だ!」

「君達は早く死体を本隊へ運んでくれ、後は俺達が引受けた」

修はさう言ふと伏せをして、早くも銃を構へた。つゞいて、七人の兵もバツと伏した。

二人の兵は、戦友の死体を背負つて、まつしぐらに走り去つた。

今となつては修の心は洗ひ拭はれたやうに爽々しかつた。

(清水を失つた上は、いつでも朗らかに死ねる、さうだ、戦つて〜、戦ひ抜いて、花々しく戦死してやるぞ!)

忽ちにして敵味方の銃聲が交々、朝の静寂を破つて野面に飜した。

敵は案外小部隊だ、多分偵察に出て一行と遭遇したものらしい、どうせ、決死のつもりでやるのなら大部隊の方が張合があるのだが、これでは一寸手堪へ

「清水の仇だ、思ひ知れ！」

修は引金を引く度に、胸の裡でさう叫んだ。

味方はたつた八名だか、その意氣に於ては到底比較にならない。

敵兵は見る／＼中にバタ／＼將棋倒しとなつた、それと見て、忽ち敵は怯み出した。

一行はその虚に乗じて、更に猛射を浴びせた。銃身が赤熱するほど、撃つて撃つて撃ちまくつた。

これにはさすがの兵賊もゐた／＼まらず、ドツと崩れ立て、死体を打すてたま／＼潰走した。

「萬才、萬才！」

一同は思はず跳り上つて歡呼した。幸ひに、誰一人徴傷だに負はなかつた。

「これで仇が討てた譯だ！」

「やつと胸が清々した。ドレ引揚げよう」

修もこれで何やらやつと償ひをする事が出来たやうな氣がした。

一行は元氣よく歸途についた。

美知子はあわた／＼しく外から歸つてくると、轉がり込むやうに父の部屋へ入るなり。

「お父さん、お父さん。妾お願ひがあるのよ！」

と、頓狂な聲で言つた。

新聞の戦争記事に讀み耽つてゐた泰藏老人はびつくりして、振返つて、老眼鏡越しに美知子の方を見た。

「びつくりさせるぢやないか、一体なんだい？」

「お父さん、實は妾、篤志看護婦を志願したのよ!!」

「何、篤志看護婦？」

「あまりの意外の言葉に父親は呆然とした。

「え、いくら女だつて零下三十度の滿洲で生命を賭して我が生命線を守つてゐる兵隊さん達の事を思ふと安閑としてはられませんから、妾お父さんに内密で、陸軍省へ、篤志看護婦志願の血書を出したのよ、そしてお國のために幾分なりと働かうと思つて、……さうしたら今日、陸軍省から、呼出しがあつて、両親さへ承諾なら篤志看護婦に採用して下さるこの事でした。妾もう嬉しくつて〜！」

美知子はうれしさが押へ切れぬやうに室中をこび廻つた。

父親は呆れたやうに美知子を見やつてゐたが、

「まあ、ちつとしづかになさい、一体、お前それほどの事をなせ一應お父さんに相談しなかつたのだへ？」

「だつて、お父さんに相談しなかつたつて、お父さんが勿論、大賛成を下さる事はチャンと分つてゐるんですもの、……お父さんは何しろ熱心な忠君愛國主義者でせう」

これにはさすがの父親もダアとなつて返事が出来なかつた。

「フ、フ、フ、」

と父親は苦笑した。

「困つた奴だなあ、まあ、過ぎた事は今となつてはどうも仕様がな、決つた上は行け、そして大ひに國の爲めに働け！」

「そーら、やつぱり大賛成でせう。だから、お父さんは話せるは」
美知子はいよく大得意でハシヤいだ。

「おだてるな、もし他の事をわしに無断でやつたのだつたら承知せんが、さういふ事だからまあ承知をしてやる、むしろ女にしてもそれ位の決心がなくては

「不可ん、かゝる大國難に際しては男と言はず女と言はず學國一致して當らなくてはならん、篤志看護婦とはい、思ひ付きたつた」

「いつか泰藏老人は愛國熱に燃え上つた美知子の行爲を是認してゐるのだつた『お父さん、妾男だつたらまつ先に兵隊さんになつて滿洲へ出征するんですけれども、口惜しい哉女でせう、だから、篤志看護婦を思ひ立つたのよ』

『ウン、よし／＼、さすがはわしの娘ぢや、伴は軍人として出征して娘は篤志看護婦として戦地へ赴く、家門の名譽これに如くものはぢや』

「今度は泰藏老人はさかんに娘を賞めちぎり出した。

『ところで美知子、一体、いつ出發する？』

『さうね、早いに越した事はないわ、陸軍省からは今月十五日に出發する看護婦隊があるの、妾、成可くならそれに加はりたいと思ふの？』

『ぢや、もうすぐだ、ぢやあ大急ぎで仕度をしろ！』

——急轉直下問題は解決して、それから是一家總動員、轉手古舞いで準備にとりかゝつた。

清水の老母も、すつかり体が快くなつてゐたので、いそ／＼と手傳ひをした『美知子さん、彼地へゐらつしやると、殊に依るとお兄さんに逢へるかも知れませんか』

『え、妾、實はそれも樂しみにしてゐるのよ、それから、小母さん、もしかしたら、茂雄さんにもお會ひ出来るかも知れなくつてよ、さうしたら宜しくお傳へしておくわ、それはさうと茂雄さんからは、その後お便りがあつて？』

『いゝえ、ちつとも、何しろ錦州攻撃が追つてゐるので、それ所ではないのでせう』

『さうね、家の兄さんからもその後音沙汰なしよ、家の事なんか思ひ出す暇がないのでせう』

『それでなくつちや戦争は出来ませんわね』

かくして、準備は全く調つた。

いよいよ出發の前夜になると、親戚知己一同を招いて、お赤飯に鯛のお頭付で、彼女の首途を祝つた。

『何しろ、こんな喜ばしい事はない、子供二人がお國の役に立つたかと思ふとわしはもう何も思ひ残す事はない、美知子、兄さんと二人でしつかり國の爲に働くのだぞ!!』

と、秦藏老人は頗る上氣嫌だつた。

十五日になると、美知子は東京驛頭に沸くやうな『萬歳萬歳』の歡呼と、旗の波に送られて、はるくと滿洲へ向つて出發した。

女性の身として、それは、一生一代を通じて忘れ得られない尊い感激であつた。

X

修はその後も、清水の行方を氣遣つて、今日戻つて来るか、明日戻つてくるかと、心待ちしてゐたが、その期待も空しく日がすぎた。

今は一縷の望みも断たれた。戦死といふ疑念はいよいよ濃くなつて來た。

もし、戦死としたら、せめてその死体なりと見付けてやつて、そして自分の手で骨を拾つてやりたいと思つた。

修は清水が無事で戻つて來た夢を何度も見た。そして、眼がさめてから、いつも落膽した。

東京にゐる老母のことを思つて心が痛んだ、どうしても、清水が戦死したといふ事を筆にするに忍びず、修は、手紙を書くのを一日延ばしにした。

何だか、

『やあ!!』

と言つて、清水が元氣な姿でヒョッコリ現はれるやうな氣がしてならなかつた。果然、その豫感は的中した。

——丁度三日目の事であつた。

木村上等兵があわただしく營舎へ走り込んで来て、

「オイオイ、清水が生きてゐるぞ！」

と、頓狂な聲で叫んだ。

「何、清水が生きてゐた、ほんとうか！」

「清水が！ 何處に！」

「なに清水が！」

居合せた兵士は全て感電したやうに一齊に總立ちになつて、木村を取巻いた

勿論、修もその一人だつた。

「實は俺、今日、中隊長から頼まれて奉天の野戰病院に入院してゐる或將校の

所へ届物に行つたんだ、受付で返事を待つてゐる中に、フト入院負傷者の名札が目についたのだ、もし誰か知つてゐる者がゐはしまいかと思つて、ズーツと眼を通して行くと思はずハツとした。第〇〇中隊清水茂雄つて名が見えるんだその時の嬉しかつたの何のつて！ やあ、奴生きてゐたのか！ と思はず飛上つた。そして、早速、面會を願ひ出たら、當人は重態だから、この一週間面會は許さんとの事、残念だつたが、どうも仕方がない、お、それから桂は、やつぱりあすこに搬ばれたんださうだが、收容するとすぐ絶命したさうだ」

「ちや、桂はとうとう死んでしまつたのか！」

「それにしても、清水は運のいゝ奴だなあ」

修は胸をわくわくと喜びにふるはして聞いてゐたが、いきなり皆を押し分けつつかゝと進み出ると、急ぎ込んで訊ねた。

「オイ、木村、ほんとうか、ほんとうに清水は生きてゐるのか！」

意外な修の權幕に木村の方で却つて面食つた。

「ほ、ほんとうにも何にも、現に俺が病院へ行つたんだから確かさ」

「あゝ、うれしかつた！ 助かつた！ 有難う！」

修は思はず木村の手を犂と握りしめた、双眼からはバラ／＼と涙がほとばしつた。

異常に昂奮した修を、戦友たちは、呆氣に取られて打眺めた。
更に修は吃り／＼、

「そ、そして傷はどこだ！ 命は、た、た、助りさうか？」
と、詰め寄つた。

「それは俺には判らないなア、何しろ面會させてくれないんだから……」

「で、一体どんな容態なんだ！」

「そ、それも判らないよ、會はないんだからさ」

修は嬉しさのあまり、すつかり顛動してしまつた。

「よし、ぢや、俺これから行つて會つてくる」

矢庭に修が走り出さうとしたので、木村はあはて、引き止めた。

「オイ／＼、行つたつて無駄だよ、さつきも言つた通り、一週間ばかり面會は出来ないんだから……」

「さうか？」

修は氣拔けたやうに立止つた。が、すぐ思ひ返して、

「まあ、こに角、生きてゐてくれりやいゝや」

と呟いて、少しもちつとしてゐられないやうすでソワ／＼し乍ら、夢中でそこら中を歩き廻り初めた。

木村を圍んで他の者が話し出した。

「それにしても、どういふ譯で奉天野戦病院へ送られたんだらう？」

「さあ、それはよく分らないが、多分、本隊とはぐれて、迷つてゐる中に道を間違つてとんでもない方へ行つてしまつたんだらう、その中に敵弾にやられて氣を失つてゐるところへ、折よく奉天野戦病院の衛生隊が通りかゝつて收容したんだらう」

木村はそんな推測をした。

「ちや、どうしてすぐ此方へ通知がなかつたんだらう？」

「いや、奉天野戦病院ぢやひつくり繰るやうな大騒ぎだ、各方面から續々負傷者が擔ぎ込まれてくるので轉手古舞ひをしてるよ、あれちや逆も手が廻らないよ、だから此方への通知も遅れたんだらう、だから、俺から取敢へず中隊長殿へ報告しておいた、中隊長も「おゝさうか、それはよかつた！」と大へん喜んで居られた」

「それは貴公、お手柄だつたな」

一人の戦友が生きてゐたといふ事によつて、一同の顔は急に晴々しくなつて何となく營舎の中には明るい氣分が漂つた。

修は高潮した喜びの昇奮が未だ去らず、

「よかつた！ よかつた！」

と獨り呟き乍ら營舎の中をぐる／＼歩き廻つてゐるのだつた。

×

何だか胸がムカついて苦しい。

うつすらと眼を開くと、眩しい外光が瞳孔にしみ込んだ。

ハテこゝは何處かしら？ と思つて四邊を見廻さうとしたが、体の自由が一向利かない。

一体、俺はあれからどうしたんだらう！

茂雄は、夢のやうな朧げな意識を、しきりに手繰らうとしたが、どうしても

ハッキリしない。

そこへ、誰やらが近よつて来て。彼の顔をさしのぞきこんでやさしく聲をかけた。

「どうだ、氣が付いたか？」

それは軍醫だつた。

「一体、こゝは何處なのでありますか？」

茂雄は先づ先刻からの不審をさう訊ねた。

「ここは奉天の野戦病院だ」

「野戦病院？」

鶉鴒返しにさう呟いて、茂雄は初めて領けるものがあつた。

(あの打虎山で兵賊達の包圍に逢つて、激戦してゐる中に、遂に部隊にはぐれてしまつた、あの時は確か、桂と平川と高梨と四人だつた、四人とも數倍する

兵賊を相手に戦つて戦ひ抜いた、眞先にやられたのが、高梨、次ぎにやられのが平川だつた、俺と桂は最後まで踏み留つたがその中に、桂が、腹部に貫通銃創を受けたので、俺は桂を背負つて、重圍を切拓いて脱出しようとした、ウンその途中で急に肩先がしびれたかと思ふとばつたりと打仆れたが、それつきり氣が遠くなつてしまつた。さてはあの時にやられたのだな、そして運よく衛生隊に発見されて、こゝへ搬び込まれた譯なんだらう……)

茂雄にはやうやく現在に到るまでの経過がおぼろげ乍ら分つて來た。それにしても氣になるのは、戦友の桂の事だつた。

「軍醫殿、桂はどうしましたか？」

「桂？ 桂つて誰だ」

「私と同じ隊の者ですが……」

「あゝ、お前が背負つてゐた兵のことか、あの男はこゝへ搬ばれると同時に絶

命してしまつた、何しろあの重傷では助からん」

「ちや、桂は死んでしまつたのか？」

茂雄は歎息するやうに呟いた。高梨も死んでしまつた、平川も死んでしまつた、生き残つたのは俺一人、と思ふと、茂雄はたまらなく淋しくなつた。

それはそうと櫻井はどうしたらう？、フト、新しい不安が彼の胸に湧き上つた。あの激戦では、殊によるなら、やられたかも知れない。

もし、生きてゐるのだつたらすぐにも會ひたい。とに角、彼の安否を訊ねて一刻も早く本隊へ戻りたい、と思つた。

「軍醫殿、所屬の隊へ早く歸らせて頂き度いのですが……」

彼が矢も楯も堪らぬ様に起き上らうとすると、軍醫はあわて、彼を押し止めた。

「ば、馬鹿言つちや不可ん、君は今まで意識不明だつたんだ、今やつと氣がつ

いたばかりぢやないか？ それなのにどうして勤務出来るもんか、暫くこゝで静養しなくつちや不可ん」

それを聞いて茂雄は急につかりした。

そして、力なく再び哀願的に訊ねた。

「ちや、私は一体いつ頃になつたら再勤務につけるのでせうか？」

軍醫は首をかしげた。

「さうだなあ、まあ三週間はかゝるだらう」

「三週間経てば戦線へ出して頂けるでせうか？」

軍醫は一寸當惑した面持で、

「さあ、それはわしには何とも保証しかねる、今後の経過に待つより仕方がない、まあ、焦らず氣を落付けてゆつくり静養し給へ」

もし、これつきり戦場へ出られないやうな事になつたら、と思ふと、茂雄は

無情に情けなくなつて来た。

『軍醫殿、戦線へ出られない様なら私は死んでしまつた方が、よつほどいゝのです、何卒軍醫殿、戦線へ出して下さい、お願いです、お願いです』

茂雄は、涙をたゝへ乍ら歎願した。

『いや、君のやうにさう興奮しては不可ん、出られらるやうにならつたら君に言はれる迄もなく私が許してやるから、それまではわしの言ふ事をきいて、おとなしく静養したまへ、さうしないと早く快復しない、こゝにゐる間は、わしの言ふ事を絶対に守つてくれなくては困る』

軍醫のやさしい言葉の中には嚴たるものがあつた。諒々としてさうさとされると、茂雄はそれ以上、抗する事は出来なかつた。

『では、軍醫殿にお任せいたします』

『ウン、わしの心が分つてくれたか、ちや、大切にしたまへ』

と言つて軍醫が立ち去ると、茂雄は押え押えてゐた口惜しさ悲しさが急に堰を切つた様に胸にこみ上げるのを覺へた。そして、白いシーツの上に顔を埋めて、肩をふるはせながらはげしくすゝり泣いた。

×

よう／＼待ちに待つた一週間が経つた。

修にとつては全くそれは一日千秋の思いであつた。

修は中隊長の許可を得ると、直ちに打虎山驛から、軍用列車に乗つて奉天へ向つた。

汽車の走りももどかしい程、修はいら／＼した。

行き違ふ列車といふ列車は、錦州出征の日本兵を満載して行つた。各驛のプラットホームには、支那人や在留邦人が黒山のやうに群がつて『萬歳萬歳』を連呼して、日の丸の旗を打振つてゐた。

數時間の後に列車は奉天驛へついた。

野戦病院は驛の間近なので、すぐ分つた。

修はそわ／＼と胸を喜びにときめかし乍ら玄關を入つた。

受付へ立つて、清水茂雄に面會したいと申入れると、暫らく待たされた。

やがて、看護兵が出て来て、先に立つて案内をしてくれた。

コロホルムの匂がブーンと鼻を衝いて病院らしい冷たい陰惨な気分におそはれた。

軍醫や、看護兵や、看護婦があわたとしげにゆき交ふたり、時折、擔架に載せられて負傷者が擔ぎ込まれて來たりする所を見ると、さすが戦時気分である好氣心でチラツと兩側の病室を覗いて見ると、重態負傷者らしいのが呻吟してゐる室もあれば、輕傷者らしいのが、ベッドに起き上つて賑やかに談笑してゐる室もあつた。

廊下を幾つか曲つて、奥まつた病室に修は案内された、明るい病室には、ベッドが澤出並べられて、何れも負傷者が横はつてゐる。

修はあまり興奮させては清水の体に影響を及ぼすから先づ自分が努めて、冷靜にならうとしたが、いよ／＼清水に會へると思ふと、胸の昇つてくるのを禁じ切れなかつた。

看護兵は一つのベッドへ近づくと、

『清水一等兵、面會人であります』

と聲をかけた。

清水はうと／＼眠つてゐるらしかつた。ハツと、目を開いた、修はつか／＼と進んで、

『清水！』

と一言言つたきり言葉がでなかつた。ちあ／＼と忽ち涙が惨み出して、視界

がポーとした。

「お、櫻井！」

二人の手は堅く握り交はされた。

清水の眼からも滂沱たる涙があふれて頬に傳はつた。

しばらく、二人は無言だつた。

「清水、よく生きてゐてくれた！」

「残念だ、やられた、体が快くなつたら、この仇はきつと討つてやる」

「俺は随分君を探したぞ、君一人死なせはたくはなかつた」

「有難う！ 俺も君に會いたかつた」

「傷は何處だ？」

「肩だ、もう大分いゝ、後二週間もたてば又戦線へ出られる、さうしたらウン

とやるぞ！」

「ウン、その元氣なら大丈夫だ、一諸に大いにやらう、早く治つて歸つてくるのを待つてゐるぞ、これで俺も安心した」

「錦州はまださうだな」

「ウン、取らうと思へば譯はないんだが、何しろ國際問題が五月蠅さいのでなア、まあ、君が快くなる頃には一舉にやつけるころになるだらう」

「ちや、僕の爲めに待つてくれるやうなもんだな」

「アツハ、まあ、そんなもんだ」

二人の氣持はだん／＼軟くほぐれて來た。

「それにしても俺がこゝにゐるのがよく分つたなア」

「ウン、一週間ばかり前に木村から聞いたんだ、何でも木村がこゝへ用があつて來て、君の入院してゐる事を聞いて來たんだ、俺はてつきり君が死んだとばかり思つてゐたので、その時の嬉しかつたの何の……すぐにやつて來ようと思

つたら、一週間以内は面會を許さないとの事なんで、今日まで辛い思いで待つてゐて、すぐこんで来たのだ。——一体又、君はどうしたんだあれから……」

「ウン、何だかまるで夢の様さ、激戦最中にいつか本隊とはなれてしまつて、ふと氣が付くと、高梨と平川と桂と俺の四人切りさ、そこへ兵匪共ちやんくとやつて来やがるのさ、打つてく打ちまくつて撃退したが、相手は何しろ數倍、此方はたつた四人と来てゐるので敵いつこはない、まつ先に高麗がやられつゞいて平川が撃たれ、桂と俺の二人きりになつてしまつた、で、止むなく敵の包圍を破つて脱出し、無中にどこともつかず走つたよ、と、又桂がやられた桂を背負つて逃げて行く途中、今度は俺がやられ、そのまゝぱつたり打仆れて氣を失つてしまつた——、ふと氣がついて目を開くとこの病院へ搬ばれてゐたんだ、何でも、この衛生隊が通りかゝつて二人を救護してくれたのださうだしかし、桂の奴は可愛さうに、こゝへつくとも間もなく死んしまつたさうだ……」

惜しいことをしたよ、俺は只一人生き残つて、戦友達に對して濟まないやうな氣がするよ」

清水は涙ぐんで沁々と言つた。

「ウン、桂は全く惜しい事をしたなア、君が快くなつたら俺達で仇を討つてやらうよ」

清水が感傷的になりかけたので、修は話題を一轉して話しかけた。

「さうく、君を喜ばせたい事があるよ、君のお母さんね、僕の父の發議で僕の家の方へズツと来てゐるよ、體をすつかりよくなつたさうだ」

「いや、お袋がいろくお世話になつてすまない、お禮を言ふのをすつかり忘れてゐた、で、又、どうして君の家へ厄介になつたんだね」

清水は意外さうに訊ねた。

「それか實は僕の父の發議なんだ、僕がゐなくなつて家内が淋しいし、室も明

いてゐるので、話し相手旁々もし来て頂けたら大へん都合だと言つて、強つてお頼みしたのさ、美知子も同じ家にゐればお世話するのも一層便利だいでね、するとお母さんは遠慮して辭退されたが、托げて来て頂いたのださうだ」

「さうか、それは濟まないなあ、君には何とも御禮の言ひ様がないよ、これで僕も後顧の憂はなくなつて安心して討死が出来る譯だ、お父さんによろしく御禮を言つてくれ給へ……、それはさうと、お袋には僕が負傷した事は知らさないだらうね、年よりに、あまり心配させたくないからね」

「うん、俺もさう思つて知らさなかつたよ」

——その時、一人の看護婦が表の廊下を通りかゝつたが、ヒョイと眞面に修の視線に出會ふと、同時に二人は聲を立てた。

「アラ、兄さん！」

「お、美知子!!」

美知子はバタ／＼と走つて来た。

意外な所で、意外な姿をした妹に出會つたので、修は夢ではないかと許り疑つて、つくづく美知子に見入つた。

「美知子、お前、一體、どうしてこんな所に？」

「兄さん、何しろ急なのでまだお知らせする間がなかつたのよ、妾篤志看護婦として昨日こゝへ参りましたの……」

「何、篤志看護婦？ お父さんも承知なすつたのかね？」

「え、勿論、この國難に際しては女と雖も安閑としてゐては不可ない、須らく國の爲に盡せと大賛成でしたわ」

「ウンさうか、……でも、たつた一人でよくやつて来たなア」

「え、妾だつて日本の女ですもの……然し今日兄さんにお目にかゝれるとは

夢にも思はなかつたわ』

「さすがは女、肉身の情として早くも涙ぐんだ。

「俺も全く意外だつた、まあ折角来たんだから、大ひにお國のために働いてくれ』

——清水は二人の會話に依つて、妹の美知子だと知ると、意外さうに呆然と見とれてゐるのだつた。

やつと、修は清水に氣がついて、

「美知子、ちやお前、清水君を知つてるんだらう？」と訊ねた。

「いゝえ』

「可笑しいなあ、同じ病院の中にも乍ら知らないなんて……、これが清水君だよ』

「まあ、さうでしたの、どうも失禮いたしました、私櫻井の妹の美知子でござ

います、どうぞ宜しく』

美知子は急に處女らしい羞かしみを見せて、淑やかに挨拶した。

「僕清水です、どうも今度はお袋が一方ならずお世話になりました、有難うございます』

清水はベッドの上へ起き上つて挨拶を返した。

「驚いたね、君達はちつとも知らなかつたのかい？」

修は呆れたやうに笑つた。

「え、妾何しろ、昨日来たばかりなんですもの……、そして、受持も此方の病室ぢやないもんですから……』

「どに角、こゝで會ふとは全く奇遇だよ、小説以上だよ』

美知子は清水の方をしきりに見やつてゐたが眉をよせ乍ら、

「兄さん、清水さん負傷なさいましたの？」

「ウン、清水君は大奮戦をして名譽の負傷をしたんだ、今に金鵝勳章だよ」
「まあさうですの、ちつとも存じませんでしたわ、如何です、御容態は？」
「何、もういゝのです」

「美知子がこゝにゐるとは丁度幸いだ、清水君のことは宜しく頼んだよ」
「えゝ、及ばす乍ら精々……」

「あんまり永く話しをして、體に障ると不可ない、僕は之で失敬しよう」
「まあいゝだらう」

「いや、休暇の時間ももうちき切れるから……、近い内に又來るよ、ちや大切にし給へ」

「いや、どうも有難う」

「ではお大切に……、又、後程お目にかゝります」

清水に別れを告げて、兄妹は廊下へ出た。

「いや全く、お前にこゝで會はうとは思はなかつたね」

修は更めて感慨深さうに呟いた。

「妾もよ」

「みんな家では達者かね」

「えゝ」

「どうだ、勤りさうか？」

「大丈夫よ、兄さん、とても緊張して愉快に働いてゐるわ」

「一つ、日本のナイチンゲール嬢になつて貰ふんだな」

「オホ……、すると差當り兄さんは日本のナポレオンにでもなるのね」

「うん、お互ひにその意氣でやるんだな」

「どうも手紙も書く閑もないので家の方へはすつかり御無沙汰してゐる、お別、手紙を出す序があつたら、宜しく言つておいてくれ」

「え、」

「それから、清水君をよろしく頼むぞ」

「え、」

「ちや、俺はかへる、しつかり働けよ」

「兄さんもね」

「OKだ」

「左様なら」

「左様なら」

玄關先で二人は別れた。

修は入口に立つて見送つてゐる。妹に向つて快活に手を振り乍ら、駈足で立去つた。

×

殺風景で陰惨な野戦病院へ、快活な美しい美知子が来た事は、どれほど負傷兵を喜ばした事か知れない。まるで、天女が舞ひ下つたやうに歓迎された。どこへ行つても、

「美知子さん〜」

ど、大持てだつた。

一寸美知子が姿を見せないど、彼方此方でも、

「美知子さんを呼んでくれ」

「美知子さんはどうした？」

と言つて、まるで引張風だつた。

美知子は、それらの兵士達を間断なく見舞つて、温い慰めの言葉を與へたり、世話をしたりした。

顔死の重傷者すら、美知子の、笑顔に接すると、ケロリと苦痛を忘れるほど

だつた。

修が言つた通り、彼女は今や正しく、日本のナイチンゲールになりつゝあるのだつた。

美知子は、兄に言はれた通り、茂雄に對しては、特に親切に世話をするやうにした。何だか、それが彼女の責任のやうに感じられたからだつた――。

今日しも、美知子は朝から新しい負傷者の世話や、各病室を廻つてゐた、心にし乍らも茂雄の病室を訪ねる暇がなかつた。

漸く午後になつて一寸手がすいたので、彼女は早速、茂雄の病室を訪れた。果して、彼は美知子を待ち焦れてゐるやうに嬉しげな表情をして迎へた。

『どうもすみませんでしたね、さぞ、お淋しかつたでせう、今日は、朝から迎も忙しかつたんですの……、お加減は如何が？』

美知子は詫びるやうに言つた。

『有難う、大へんいゝです、忙しくつて大へんでせう、でもよく勤まりますね僕、感心してゐますよ』

『こんな事位何でもありませんわ、お國のために働いてゐると思へば、緊張してゐるので、ちつとも疲れませんわ』

『いや、貴女は偉い、僕も早く快くなつて、貴女に敗けないやうにウンと働かなけりや、あゝ、早く快くなりたい、かうしてゐる間にも、貴女の兄さんに追越されはしないかと思つて氣が氣ちやありませんよ』

『オホ……、さう焦らずに、ゆつくり静養遊ばせ』

『いや、静養も仲々辛いですよ――その後、お家の方からはお便りがありましたか？』

『えゝ、昨日、來ました、さうく、貴男のお母さんが、もし、伴に逢うやうな事がありましたら、何を愚圖々々してゐる、早く手柄を樹て、妾を喜ばし

てくれ、と傳へてくれて仰言つてゐたと書いてありました、全くあなたのお母さんらしいわね』

「ハハハ、まだあなたに會つた事を知らないんですね、負傷して病院へ入つてゐるなんてあんまり自慢にならないから、これは内密にしておきませう、そして、治つたら一度に素晴らしい手柄を樹て、お袋を、アツと言はせてやりませう』

「え、それがようござんすわ』

美知子はそれきり話の繼目を失つて、何やらささうにうつ向いた。

白い看護婦服のびつたり體についてよく似合つた姿、健康さうで處女の香の發散する四肢、白いすつきりした頸、紅絹をくくつたやうな唇……それらを清水は眩しいやうな心地でチヨイ／＼漁み見した。贅澤な望みかも知れないが彼はいつまでも／＼かうして美知子に傍にゐて貰ひたいといふ慾望を強く感じ

た。

かうして彼女が傍にゐる時ほど、心の豊かな平安を覺える時はなかつた。

フト、二人の視線が眞面にはつたりと出會つた。と、美知子はあわて／＼ついに眼をそらしてうろたへ氣味で立上り、腕時計を見乍ら、

「あら、もう廻診の時間ですわ、では、妾失禮いたしますわ』
と、會釋した。

「いや、僕こそ……』

茂雄は快活に去りゆく美知子のうしろ姿をチーツと見送つてゐた。

X

錦州攻撃はいよいよ目前に迫つた。

〇〇〇は數萬の大軍を錦州に集中して、堅壘を築いて用意おさ／＼怠りなく『日本軍を撃滅して見せる！』

ど、傲語してゐるのだつた。

隱忍に隱忍を重ねてゐた我軍は、今にして禍根を断たずんば、東亞百年の平和を誤る因となるので、断然之を膺懲すべく決意した。

痺れを切らして待ちに待つてゐた我が將士達、之の快報を聞いて喜んだの何の！

何れも、吾こそは錦州一番乗りと、意氣込んだ。

言ふ迄もなく修もその一人だつた。

「さア、いよゝゝ、やるぞ！」

「錦州を目の前にし乍ら指を唾へてゐたんだからやり切れねえ、猫に鯉節の番をさせておくより罪だよ」

「錦州入りのトップはどうしても我隊でやらうぢやないか！」

互ひに腕を撫して豪語し、意氣昂然、既に敵を呑む概があつた。

どころへ、小川曹長がつか／＼と入つて来て、一同を見渡し、緊張した様子で

「近日、錦州攻撃を敢行する事になつたが、先づ先發隊として若干名の決死隊を募る事になつた、志望者は至急申出るがよい」

言ひ終るか終らぬ中に、一隊の全員は悉く總立ちになつてドヤ／＼と小川曹長の身邊へ殺到した。

「どうぞ、私を！」

「私を願ひます」

「私もお加へ下さい」

「私も！」

曹長は危く押し倒されさうになつてよろ／＼とよろめいた。

豫期してゐたものゝ、かうも全員擧つて志願しようとは夢にも思はなかつた
「オイ、それぢや困る、隊の者を全部決死隊に採用する事は出来ん、二十名も

あればよいのだ』

『ちや、私を願ひます』

『いゝえ、私を』

『私を、どうぞ！』

全員は再びひしめいてドツと殺到した。

これではどうにも決めようがない、曹長はすつかり途放に暮れて、

『どうも困るな、では、兎に角全員志願者である旨を中隊長に報告してくる、

採決方法は何れ後で知らせる』

と、言ひ残して立去つた。

後で一同――

『ドレ、一つ故郷へ最後の手紙を書くかな』

『俺も一つ書置きをしやかう』

『オイオイ、逸まつて笑はれるな』

『馬鹿いふな、落選したら切腹するばかりだ』

『俺は武士のたしなみ、垢のつかない襯衣とでも着替へて置かうか』

などと言つて是が非でも決死隊に加はらなければ承知出来ないと言つた様子

待ちに待つてゐたが、その日は遂に決死隊の人名は發表にならなかつた。

誰しもその夜は落々眠れなかつたらう。

夜が明けた。今日こそ發表になるだらうと何れも緊張の面持で待ち構へてゐ

ると、果然、木村曹長がにこ〜し乍らやつて來た。

一同は又もドツと殺到して忽ち曹長を包圍した。

『發表でありますか？』

『私はどうなりました』

『さう急ぐなく、實は昨夜中隊長が抽籤で二十名を選抜された、これから讀

み上げる、但し断つておくが、選に洩れたからと言つて決して不平を言つては不可ん、いゝか！

用意周到、曹長はさう念を押しておいて、胸のポケットから軍用封紙を取り出して披げた。

一人の兵がいきなり覗き込もうとする、

「コラ、覗く奴があるか！」

と、一喝して、曹長は、

「皆、もつと、後ろへ退つた〜」

と、手で押しやつた。

一同ばズラリと整列した。誰も彼も眼の色を變へて緊張してゐる。息詰まるやうな沈黙——そして、固唾を呑んで、曹長の一言一句をも聞き逃すまいとして耳を敬てた。

「井上君太郎……」

第一番に読み上げる聲がはつきり冴えて耳を衝いた、修は思はずビクリとした。

「高瀬由藏……」

列んでゐる兵士は思はず動揺めいた。

「足立鶴藏……」

四番、五番と進んで行つた、自分の名は出て来ない、修の心臓の鼓動は段々昂まつて来た。

今度は（櫻井……）と呼ぶかなと思つたがやはり違ふ。頭がクラ〜として昏倒しさうだ、體がポツポツと火熱つて来た。

十番をすぎたが、まだ自分の名は出ない。絶望的の暗い氣持が蔽ひ被さつて来た。

いよ／＼あと三人しか残つてゐない、その中になければいよ／＼駄目だ。
(神よ！)

ひそかに、修は胸の裡で祈らずにはゐられなかつた。

十七番、十八番、十九番……

いよ／＼、どんづまりの最後だ！

修は今にも倒れさうになる體をやつと支へてゐた。

「櫻井修……」

同時に一同の羨望的な視線が一時に彼の方へ注れた。

助つた！ 嬉しさに彼の體はわな／＼とふるへ戦いた。

「以上、二十名を決死隊に命ず」

言ひ終ると曹長は逃げるやうにしてサツと踵を返した、それでも未練に四五名の兵が追絶つて、しきりに決死隊に加へてくれるやうにと歎願した。が、結

局断はられて悄悄と戻つて來た。

す／＼泣きの聲がしたので、つと振向くと一人の兵が、棒立ちになつて、せがり上げてゐるのだつた。修は可笑しいやら氣の毒やらだつた。

絶望的にごろつとベッドの上へ轉る者もあれば、頭を抱へて椅子へ崩折れるものもあつた。

しかし、修はそれらの僚友に同情すべく、あまりに喜びの方が大きすぎた。選まれた二十人と共に腕組みをし乍ら、彼は夢中で「萬歳々々！」を歡呼しつゞけてゐた。

いよ／＼彼の人生の結論に到達したといふ明るい朗かさが胸一杯にあふれてゐた。

(これでもう何も思ひ残す事はない、後はやれる丈の事をやりさへすればいいのだ！)

何といふ爽快さ！ 何といふ歡びであらう！！

X

清水君、喜んでくれ、俺の最大の目的はいよいよ叶へられた、俺は運よく決死隊員に選拔された、何といふ恵まれた俺だらう！ 近日某地へ向つて出發する事となつた、無論、生きては歸らないつもりだ……従つてこの手紙は最後のものとならう、いやなる……僕はこゝに更めて君の年來の好誼を厚く感謝する、全くそれは僕の生涯に取つて忘れられないものだつた、意多ければ筆進まず、これを以て簡單ながら決別の辭とする、末筆に臨んで君の健康を祈る。

茂雄は讀み終つて、大きな羨望と焦躁を覺えずにはゐられなかつた。

(やつたな!!)

といふ氣が痛切にした。

自分も斯うしてはゐられないといふ氣がした。

(さうだ、軍醫殿に頼んで是が非でも退院させて貰はう、このまゝ病院に置かれては悶え死んでしまう)

茂雄は直ちに手を伸して、枕許のベルを押した。

看護兵が何事かと思つてやつて來た。

「何か用でありますか？」

「君、軍醫殿をすぐ……」

「どこかお悪いですか？」

「そうぢやない、他に急用が出來たんだ」

「さうですか、ではすぐ呼んできます」

看護兵は合點の行かぬ容子で立去つた。

やがて軍醫がやつて來た。

「どうかしたかね？」

「軍醫殿、退院させて頂きたいのであります」

あまり唐突なので軍醫は笑ひ乍ら、

「何だね、不意に……？ 君の退院々々はもう聞き飽きてるよ、まあ、時期が来るまでおとなしくしてゐたまへ！」

「軍醫殿、私は真剣にお願ひしてゐるのです」

茂雄の只ならぬ容子を見て取ると軍醫は、

「一體、何かあつたのかね？」と問ひ返した。

「ハイ、私の親友、死ぬ時は一緒に誓ひ合つた戦友がいよいよ今度決死隊に選ばれたのです、私は、そ、それを聞いて、もうちつとしてゐられません、軍醫殿、どうぞ、お察し下さい」

茂雄は涙を拭ひ乍ら、修の手紙を黙つて差出した、軍醫は受取つた、その顔

には見る／＼うちに嚴肅な色が現はれた。

「いや、軍人として君の希望は無理もない、わしもこの上強つて引止めようとは思はん、宜しい、退院の方はわしが取計つてやる」

さすが軍人、分りがよい、一言の許に許してくれた。

「では、許してくれますか、有難うございます」

茂雄の聲は嬉し泣きでおろ／＼してゐた。

軍醫は感動した様子で、しばし、茂雄を眺めてゐたが、やがて、しづかに歩み去つた。

茂雄は軍醫の後ひ姿を伏し拜んだ。

彼の心はもう戦場へ飛んでゐた。

さぞ、修が喜んで迎へてくれるだらう！ その情景までが髣髴として眼の前に泛び上るのだつた。

『茂雄さん、お芽出度うございます』

ふと、さう聲をかけられて振向くと、そこには美知子がここにほゝえみ乍ら佇んでゐるのだつた。

『あつ、美知子さん！』

『いよく、退院遊ばすさうですのね、只今あちらで承りましたので、お祝ひを申上げにまゐりましたの……』

『えゝ、やつと許されましたよ、あなたの所へ兄さんから手紙來ませんでしたか？』

『えゝ、まゐりました、ほんとうにお二人共揃つてお芽出度いわね』

『あなたの兄さんの手紙のお蔭ですよ、あの手紙を軍醫殿に見せたら、忽ち効目が現れたんです』

『マア、さうですの……、よかつたわねえ』

『美知子さん、あなたには随分お世話になりましたねえ、ほんとうに何と言つてお禮を申上げてよいやら分りません、只、何にも御恩返しの出來なかつた事が僕残念で堪りません』

『ごんでもない！ 妾は、あなたが立派に軍人としての使命をお果し下さるのを何のお禮よりも喜びますわ』

『えゝ、その點だつたら勿論大ひにやります、安心して下さい』

茂雄は眉宇に強い決心を現はして言つた。

美知子は何やらしばらく躊躇してゐたが、やがておづ／＼とポケットから手を取り出し乍ら、

『茂雄さん、何か御餞別にと思つたのですけれども、合憎、何も持ち合せがございませぬの……、これつまらないものですけれども……』

と言つて、何やら差出した。

「そ、そんな事、もう、お世話になつた丈で充分なのに……」
茂雄は恐縮して尻込みした。

「いゝえ、何でもありませんの……、どうぞ……」

美知子は心持ち赤くなつてしきりにすゝめた。

「さうですか、すみませんなあ、ちや、頂いておきませう」

茂雄はあまり譲り合つてゐるのも變なので受取つた。それは、山櫻を美しく染め抜いた縮緬の帛紗だつた。

「こんな結構なものを頂いていゝのですか！ どうも有難うございます、僕に取つては、何よりのお守りになりますよ」

茂雄は心から嬉しさうに押戴いて、チヨツキの内側のポケットへ大切さうに藏つた。

そこへ、他の看護婦が入つて来て、美知子に何やら囁いた。美知子は頷いて

あわてゝ立上ると、

「茂雄さん、一寸用がございますから、又後で上りますわ、退院はいつ頃ですの……」

「明日の朝です」

「では、その時又お手傳ひに上りますわ」

と言ひ残して忙しさうに立去つた。

茂雄はそわ／＼と浮き立つやうに嬉しくてならなかつた、この幸福をみんなに分けてやりたいやうな氣がした。

無論、それは戦場へ行かれる喜びであつた事は言ふまでもない。——しかし心の隅のどこかに、彼を病院に引止めるものゝある事も亦否むことが出来なかつた。

それは美知子だつた。

彼はさう氣付くと、獨りで赤くなつた。

修に會へる喜び！

茂雄は胸を躍らせ乍ら翌朝、一直線に久し振りで打虎山の本隊へ戻つた。が、運命の神は何といふ悪戯をするのであらう！

修は一足違ひに決死隊として、既に某々地點へ出發した程だつた。

茂雄は落膽した。しかし、他の戦友達は、擧つて歡呼して彼を迎へてくれた

「清水、よく無事に歸つて來たなア、俺達は一時、君はてつきり死んだものと思つてたぞ！」

「さうか、一度死んだと思や尙更この命は惜しくはない、俺は、どうかして決死隊に加へて貰はうと思つて、歸つて來たんだが、残念だなア！」

「いや、その残念なら我々がもう疾うに味はされてゐるんだ、今頃やつて來て

そんな贅澤な事を言つたつて駄目さ！」

「それにしても、櫻井の奴は、何といふ運のいゝ奴だらう」

「諦めろ〜、この上は、錦州攻撃の始まるのを待つばかりさ！ 死なうと思

へばまだいくらも機會はあるぞ」

僚友達に宥められて、茂雄は逸り立つ心をやうやく抑へつけた。

その中に、錦州方面の形勢はいよ〜緊張して來た。

敵方の情報は櫛の齒を挽くやうに入つた。兩軍の衝突は今や時の問題となつて來た。それも極めて切迫してゐる。

將士一同は、今か〜と固唾を呑んで手具脛引いてゐるのだつた。

——ど、果然、出動命令は下つた。

待ちに待つてゐた丈に、一同は勇躍を禁じ得なかつた。

『〇〇部隊は〇〇を経て錦州へ進撃すべし』

この司令部の命令だった。

號令一下出動準備は直ちに調つた、武裝甲斐々々しく全部隊は行進を開始した。

この日は滿蒙名物の肌をつんざくやうな朔風が吹きすさんで、文字通り紅塵萬丈、咫尺を辨じなかつた。

しかし、將士等は意氣昂然、錦州へ錦州へと行進をつゞけた。

いよいよ敵地近く肉迫したので、油断はならない。全員は緊張して肅々として進んだ。

一目茫々たる廣野であるが、時たま小さな部落がある。さうしたところには便衣隊や兵賊が潜伏してゐて、いつ射撃を加へるか分らない。

で、先づ、村落へ近づく度に斥候を放つて偵察させるのだつた。遼河の支流に沿つた民營屯といふ所へ出た時である。

中隊長は、

「止めつ！」

と號令をかけた。

一同は一齊にビタリと行進をやめた。

中隊長は一同を見渡し乍ら、

「この邊には兵賊が出没するとの事だ、依つて三木、黒田、清水の三名に斥候を命ず、残員はそのまゝ休息せよ」

と、命じた。

茂雄は思ひがけない命令に狂喜した。そしてバネ仕掛のやうに、いきなり列からとび出して中隊長の前に立つて擧手の禮をした。

三木も、黒田も、同様に進み出た。

茂雄は全隊員の羨望の眼が、後ろから射つけてゐるのを、ハッキリと意識し

て得意に思つた。

『三名は直ちに前方三百メートルに亘つて敵狀を視察せよ、すぐ行け！』

『ハッ！』

茂雄は再び中隊長に向つて擧手の禮をすると直ちにタタタ、と走り出した喜びに胸がふるへおのゝいた。足が地を踏んでゐるやうな氣がしなかつた。三人は十メートル位の間隔を作つて、前方を透し見乍ら、地に這ふやうにして近づいた。

土饅頭のやうな支那人の百姓家の竝んでゐる部落が次第に近づいて來た。

いつ何邊から不意に敵が現はれるか分らない、神經は針のやうに鋭くなつて興奮の爲めに體中はぼつぼと頼つた。今は寒さも無感覺だ。

部落の中はひつそりとしてゐた。

細心の注意を八方へ配り乍ら、三名は徐々に部落の中へ足を入れた。

先づ、この邊の百姓に敵が近くにゐるか、どうかを確かめようと思つて、茂雄は、と或る一軒の百姓家へ近づいた。

兵匪の襲撃を恐れてか、入口には戸がびつたりと閉つてゐる。

三人は足を忍ばせて近よると、トン／＼と戸を叩いた。家の中は空つぼなのか、何の應へもない。

『どうやら、藻抜けの殻らしい』

『ぢや、他の家へ行つて見よう』

三人は連れ立つて歩き出した。

——ものゝ、四五丁も行つた時である。

パチ／＼といふ銃聲がしたかと思ふと、ビュー／＼と銃弾が三人を掠めて落ちた。

『それ、油断は出來ないぞ！』

三人はいきなり、べつたりと地上へ伏した。

敵は何邊と見ると、先刻の空屋の窓の邊から、白い煙が洩れてゐる。

『畜生！ あんな所に巢喰つてゐやがつた』

三人は直ちに銃を構えて、空屋目がけて猛射を浴びせた。

バチ、バチ、バチ……………

彼我の銃聲が交々ひびき渡つた。

と、その時、ビューと敵の一弾が飛び來つたかと思ふと、茂雄の傍にゐた三

木が、

『やられた！』

と叫んで、銃を抛り出した。

茂雄は吾を忘れて思はず駆けよつた、三木の右腕からは滾々と血潮が吹き出

してゐた。

『しつかりしろ！ 傷は浅いぞ!!』

『口惜しい！』

三木は身悶えをして、しきりに起き上らうと焦るのだつた。

茂雄は、手早く繃帯を取出して簡単に應急手当を加へてやつた。

『三木、この仇はきつと討つてやるぞ！』

『何つこれつ位何でもない！』

氣丈な三木がバツと起き上ると、銃を取つて、再び應射し初めた。

が、何しろ、敵は家屋の中なので姿が見えないが、味方は外で丸見えなんだ

から形勢甚だ不利だ。

『チエツ、忌々しい奴だ、何とかしようないもんかなア』

『うん、さうだ、俺に任せろ』

何思ひついてか、茂雄はそのまゝぱつたり倒れたふりをすると平蜘蛛のやう

に地べたを這ひ出した。十間ばかり這つて高梁穀の積んである所まで行くと、彼はむつくり立上つた、そこは高梁の蔭なので敵の方からはちつとも見えない幸ひにも、その高梁穀は空家の裏手までつゞいてゐるので、茂雄は高梁穀の蔭を傳つて、空家の方へ一散に走つた。

敵はそれとは知らず、清水を射倒したものと思つて三木と黒田を相手に猛烈な小銃戦をやつてゐる。

茂雄はこつそり空屋の裏手へ廻ると、高梁穀を入口の雨戸へ積みかけて、バツと火をつけた。

乾き切つた高梁穀だから堪らない、忽ち火はメラ／＼と燃え上つた、而も、折柄の烈風なので、火勢は彌が上に猛烈となつてまた／＼間に藁屋を包んでしまつた。

中にゐて狼狽えたのは兵賊共、入口が一面の火なので逃げ口がない、もう銃

を、うつどころの騒ぎでなく、煙にまかれてキリ／＼舞ひを初めた。

この様子を見て三木も黒田も一散に走つて來た。

『オイ、清水、旨くやつたな、それ賊を逃すな』

兵賊共は苦し紛れに窓を破つて飛出さうとした、三人はそこへかけつけるといきなり銃剣を窓口へ突き付けた。

兵賊共は後ろに猛火、前に銃剣で袋の鼠となつて進退谷つた。そして、矢庭に銃を抛り出すと泣聲をあげて、しきりに手を合はせた。

『畜生、泣いたつて承知するもんかつ!!』

怒り立つた三木が、銃剣振かざして突き刺さうとすると、茂雄は何思つてか『待て!』と止めた。『殺すのは、いつでも殺せる、それより、此奴等を捕虜にして引張つて行つて、敵の情勢をすつかり白状させようぢやないか』

『うん、さうだ』

『それがいゝ！』

二人は異議なく賛成して、銃を納めて（出て来い！）と手真似をして見せた。賊共は吻として、吾先に争つて窓から飛び出してきた、三人は次々と出てくる兵賊を片つ端しから縛り上げた。

出てくるわ〜！ 驚く勿れ、小つぼけな小屋の中には六人もの兵賊が潜伏してゐた。

『こりや大漁だつた』

『いゝお土産が出きた』

『これが初陣とは幸先がいゝぞ』

三人は有頂點の大喜び、六人の兵賊を珠數つなぎにして、意氣揚々として本隊へ引揚げた。

果して、本隊の全員は、この殊勳に驚歎して湧き返へるやうな大歓迎、三人

を胴上げして『萬歳々々』を唱へた。

六人の兵賊は中隊長が直々嚴重に取調べの結果、匪賊とは化の皮、實は張學良麾下の正規兵と判明した。なほ且つ、錦州城外の敵軍の配備、兵數、武器等の重要な軍機を殘らず白状させ、あまつさへ、秘密地圖さへ押収した。これらが今後の我軍の行動や策戦に絶大の便宜をもたらす事は言ふ迄もない。

中隊長は、三人を招いて特に此度の殊勳を激賞すると共に、今後益々奮勵するやうに激勵した。

三人の感激はいかばかり……況んや、清水茂雄は……！

一方、決死以て各地に浸入した櫻井修の運命や如何に？

修は二十名の決死隊員と共に、打虎山を出發以來杳として消息を絶つてゐたが、その後の彼は全く、文字通り塗炭の苦しみの連續を味はなければならな

つた。

出發早々、一行は蒲條鎮附近で大兵賊團と遭遇し、寡勢よく防戦したが、力及ばず、約半数を斃され、残る決死隊員は辛ふじて包圍を脱出して逃れる事が出来た。幸運にも修もその中の一人だった。

が、素より決死隊である以上、最後の一人になつても飽くまでその使命を貫徹すべく、一行は更に危険を犯して、敵地深く侵入した。

抑々この決死隊の目的といふのは、我軍の錦州攻撃に先立つて、敵の懐深く潜入し、本隊の襲撃と相待つて敵の後方攪亂を目的としたのであつた。蓋しその使命たるや重い、従つて一同の意氣壯なる推して知る可しである。

その後も兵賊、便衣隊の襲撃に逢ふ事、數知れずであつたが、その度毎に奪戦よく之らを撃退した。而し、味方の蒙る犠牲も免かれず、更にだに少い同志は、次第に弊れて心細くなつてゆくのだつた。

そこで、修は考へた。

（かうして犠牲者ばかり出してゐたのでは、肝心の錦州へゆくまでには、全滅してしまはなくてはならぬ、死は元より覺悟の上だけれども犬死をしては何にもならない、吾々には敵軍の後方攪亂といふ重大使命があるのだ、それを果さないでは、死んでも死に切れない、これは一つ何とか考へ直して、成可く犠牲者を少くして無事目的を達するやうな方法を講じなくてはならぬ）

そこで、僚友にこの事を謀ると、何れも同意見だつた。が、さてどういふ方法を執つたらよいか？ といふ事になると、何人も名案がなく、ハタと行詰つた。

その時、修はフトある事を思ひついて、ハタと手を拍つた。

『こうしたらどうだらう、軍服を着てゐたんぢや日本軍人だといふ看板を出してゐるやうなもんだから、迎も人目を胡摩化す事は困難だ、そこで一つ支那人

に變装して錦州へ乗込むとしたら？」

「いや、そりや不可ん、軍服は畏れ多くも陛下から賜つたものだ、軍人たる者がそれを脱ぎ棄てるなんて軍人の體面にかゝはる」

と、一人が強硬に反對した。

「いや、脱ぎ棄てるのではない、一時何處かへ預けるなり隠すなりしておくのだ、重大の使命を果すにはそれ位の事は差支へないだらう」

「ちや、一體何處へ隠さうと言ふのだ」

「それは俺に任せてくれ」

何思つてか修はさう言ふと、近くの部落の中へ入つてゐた。

「櫻井の奴、あんな自信あり氣な事を云つたものゝ、旨くゆくかしら？」

「さア……」

残つた八名の者は、不安に思ひ乍らも、一縷の望みを托して待つてゐた。

約小一時間して、櫻井は部落の方から急いで走り戻つて來た。

「どうした？」

「旨く行つたよ！あの部落に一人の朝鮮人がゐるのを見付けて、同胞の誼しみだ、一つ吾々の便宜を圖つてくれと懇願すると、一寸躊躇してゐたが、義侠心のある奴で、よし私が萬事引受けましたといふのだ、さア、行かう」

「さうか、そいつあ有難い」

一同は勇躍して、修に案内されて件の鮮人の家を訪れた。その主は、趙河明といふ六十近い白髪の老人だつたが、一同の姿を見ると、ねんごろに迎へて奥へ招じた。

老人は覺可ない日本語が出來たので、どうやら辛ふじて意志を通じる事が出來た。

老人は打領いて、萬事心得たといふ様子で、暫らく待つてゐる、と云ひ残し

て外へ出て行つた。もしや、支那兵と内通してゐて、密告しに行つたのではな
いかしらといふ不安も湧いた。が、もしさうだつたらその時にはその時の覺悟
があつた。あの老人の誠實らしい様子では萬々そんな事はなさうに思はれた
老人は可成手間どつて、一時間半ばかりして漸く歸つて來た、大きな風呂敷
包みを背負つて歸つて來たところを見ると、好都合に行つたらしい。一同は吻
と安堵した、老人は風呂敷包みの中から支那の便衣を九人分取出した。何れも
汚いぼろだつた。然し、一同には丁度お誂ひ向きの物だつた。

一同は大喜び……早速軍服を脱いで、支那人に早變りした、軍服は一纏めに
して趙老人に保管をたのむ事にした。

さア、もうべたものだ、心が逸り立つので一刻も早くも、錦州目ざして乗込
む事にした。

一同は交る／＼趙老人の手を堅く／＼握りしめて、

「有難う／＼!!」

と、厚くその好意を謝した。

「どうぞ、日本の兵隊さん、うまくやつて下さい」

趙老人は門口まで見送つて一同を勵ました。

一行の姿は忽ち、朔風吹きすさぶ廣野の夕闇の中に消えた。

老人はいつまでも／＼佇んでゐた。

X

いよ／＼我軍の水も洩らさぬ作戰計畫は成つた。

滿を持してヒタ／＼と迫つた我軍は、チリ／＼と錦州を目がけて全面から壓
迫し始めた。

——と「日本軍何するものぞ!」と傲語してゐた數萬の支那軍は、それを見
ると、すつかり臆病風に見舞はれて、口ほどにもなくチリ／＼と總退却を始め

た。
睨み合つたまゝ、我軍が一步進めば、敵は一步退く。更に一步進めば、一步退くといつた調子。

今度こそは大決戦と意氣込んでゐた我將士達は齒痒い事夥しい。

敵は既に我軍の意氣に吞まれてしまつたのである。

かうなれば、一舉に錦州を占領するに如かず、と痺れを切らした我軍は、い

よ／＼十二月二十五日、全戦に亘つて總攻撃の命令を下した。

曉の空にひびき渡る進軍喇叭！ 大河の決潰したやうに殺到する軍隊！

真先にはためく日章旗！ 日にきらめく銃剣の林！ 空には爆音高く銀翼を閃

めかす飛行機！ 皇軍の意氣や正に衝天の勢ひ!!!

既に闘志を失つて意氣沮喪した支那軍は、いよ／＼周章狼狽ドツと雪崩れを

打つて總くづれとなつた。軍用列車は敗兵を満載して續々と樂州へ引上げた。

爲めに錦州城内は上を下へと沸き返る様な大混亂を呈した。

——斯くて、皇軍は時恰も二十七年前の旅順開城の吉日に當る、一月二日、

威容堂々錦州城へ乗込んだ。我軍は一兵一彈をも費さず、吾に數倍する敵軍を

驅逐して、完全に錦州を占據する事が出来た。手具脛引いてゐた勇敢なる我將

七達は、むしろあまりの飽氣なさに力抜けがしたほどである。

城内には、敵の遺棄して行つた兵器、彈藥、食糧等が到る所に山積してあつ

たさうだ。以て敵が如何に周章狼狽したか、推して知る可しである。

尙又、城外に幾重にも廻らした砲壘塹壕は最新科學の粹を盡した頗る堅固無

比なもので、我軍すら驚歎する程のものであつたが、敢て敵がそれによつて一

戦すら交へようとしなかつたのは、如何に士氣沮喪してゐたか、窺はれよう。

錦州城外の民家は何れも戸毎に日章旗をかゝげて『萬歳、萬歳』を歡呼して

我軍の入城を歡迎した。

滿蒙三千萬民族の仇敵、兎畜の如き惡軍閥を根柢より打倒した仁義の皇軍は武勳赫々今や錦州へ入城しつゝある。

見よ！ 錦州城頭、へんぼんとしてひるがへる、日章旗を！

×

茂雄は期待したやうな大決戦もなく、あんまり順調にトン／＼拍子に事が運びすぎたので、飽氣なすぎて物足りない程だった。

しかし、何と言つても、永らくの憧れである錦州へ足を踏み入れた事は嬉しさの極みだった。

それにしても修は一體どうしたらう！ 決死隊に發つて以來十數日杳として消息がないが……、茂雄の唯一つの氣遣ひはそれだった。若し修と共に無事この錦州へ入城出来たら、この喜びはもつと／＼大きかつたらうに……。

茂雄は入城早々、城内の警備を命ぜられて町角に佇んで、便衣隊の潜入を嚴

重に警戒した。彼が、既に捕へた怪支那人は十數人にのぼつてゐる。

隙さへあれば城内へ潜入して、我軍を攪亂しようとするのだから、油断も隙もならない。

今日も、茂雄が鐵甲、防寒服、銃剣手にいかめしく城内で警備の任についてゐると、一人の怪い支那人がスタ／＼と向ふからやつて來た。

茂雄は早くも胡散臭いぞ！ と直感すると

『待て！』

と、聲をかけて銃剣を突き付けた。

件の支那人はびくともせず泰然として立止つた。大膽不敵な奴だと思ひ乍ら顔を見ると、支那服こそ纏つておれ、正しく、修そつくりではないか！

『オイ、櫻井ぢやないか！』

相手も始めて氣が付いて

「やつ、清水か」

二人は思はず走り寄つて、確と手を握り合つた。

「櫻井、よく生きてゐてくれた！」

「貴様もよく無事で……」

目頭が熱くなつた。

「だが、櫻井、一體、その姿は？」

茂雄が審しげに訊ねた。

「かう變装して錦州へ潜入するよりは仕方がなかつたのさ、火薬庫はいつでも爆發出來るやうにチャンと膳立てをしておいたが、支那軍が飽氣なく退却してしまつたので、折角の骨折も無駄になつてしまつたよ」

眞黒に煤けて髭蓬々たるその顔は、彼の辛苦をまざく語つてゐるのだつた

「いや、君は立派に使命を果したのだから決して失望するに當らない」

「いや、君なればこそだ、有難う。——で、君は一體いつ退院したんだ？」

「君の手紙を見て矢も楯も堪らなくなつて、無理に退院させて貰つて、急いで隊へ歸つて見れば、君は既に決死隊として出發した後さ、口惜しかつたよ！」

「さうか！ しかし、かうして無事に錦州で會へようとはお互ひに夢にも思はなかつたなア」

「全くなア」

二人は感慨無量だつた。

「オイ、見ろよ、あれを！」

茂雄が指さした彼方、錦州城頭にはへんぼんとして日章旗がひるがへつてゐるのだつた。

言葉もなくちつと見やつた二人の眼からは感激の涙が止度なくあふれた。

「萬歳、萬歳！」といふどよめき何邊やらかが聞えてくる。 (大團圓)

繪入美談叢書 豪華版

良書は常に輝く！

各巻いづれも一流大家と一流畫家の苦心協力の結果刊行したもので、内容外觀共に申分のない出來榮えです、この繪入美談叢書こそ正に劃期的空前の少年少女の讀みものであります。

- | | |
|------------|-------------|
| 1 繪入少年美談 | 6 繪入軍事美談 |
| 2 繪入少女美談 | 7 繪入現代偉人美談 |
| 3 繪入英雄豪傑美談 | 8 繪入立志成功美談 |
| 4 繪入日本仇討美談 | 9 繪入陸海軍名將美談 |
| 5 繪入戰爭美談 | 10 繪入歷史美談 |

小學四・五・六年生の絶好の課外讀本！

四六判表紙 各冊二〇頁 各色口繪挿畫 總數三十冊
 定價各冊 金三十五錢 送料各冊 金六錢

昭和七年三月廿五日印刷
 昭和七年三月卅日發行

定價金壹圓

不許
 製復

編輯者兼 發行所 湯淺脩 一
 印刷者 塚田十五郎
 印刷所 春江堂印刷部

發行所

東京市日本橋區兩國藥研堀町
 株式會社 春江堂

電話 花 一四四
 一三八
 〇九六
 六三二
 番番番

學年別新童話

新童話 一年生

新童話 二年生

新童話 三年生

新童話 四年生

新童話 五年生

新童話 六年生

すべて小學校の教科書を標準として修身、國語、國史等を骨子とし教育と興味を合せ兼ねた最の新しい課外讀物です。純眞な兒童の心理にピッタリと一致するやう極めて細心の注意を拂つて著したもので正に學年童話中最高のものであります。

四六判各冊一六〇頁背クロース表紙五色刷美麗函入

定價各冊金三十五錢

送料各冊六錢

豪華版名作童話選集

伸びゆく兒童の情の操
 明くる正しく育む童話集！

- | | |
|-----------|-------------|
| 1 巴里の少年 | 6 青白いダイヤモンド |
| 2 少年と羊 | 7 恩を返した狐 |
| 3 猫の大臣 | 8 笛吹き王子 |
| 4 羊の角 | 9 蝶のお嫁さん |
| 5 雪のクリスマス | 10 森のうぐひす |

四六判各冊二〇〇頁六色口繪挿畫總金
 版數各冊入セフロア付美本
 定價各冊金三十五錢
 送料各冊六錢

肉體的に精神的に日に／＼育まれつゝある兒童に取りて本書は正に心の糧であり。明るく強い心の太陽であります。世の多くの父兄母姉へ！愛する兒童の爲めには非一本を與えられんことを希む。

豪華版カナオトギ叢書

八 出
來 版

麗綺なうやるめ醒の眼とツバ
年初學小は書本！集話童な
！友良の一唯てり取に生

- | | | | |
|---|----------|----|----------|
| 1 | 日本ムカシバナシ | 6 | ネムリヒメ |
| 2 | コビトノタカラ | 7 | ニンギヨノネガヒ |
| 3 | ネズミノヘイタイ | 8 | カナリヤノウタ |
| 4 | フシギナツボ | 9 | おやゆびたらう |
| 5 | カヘルノウウサマ | 10 | 六にんのゆうし |

金總スーロクーザレ紙表判六四
十畫挿繪口色六頁〇〇二各押箔
本美頗付袋ンアフロセ入葉數
錢五十三金册各價定
錢六金册各料送

面白くて爲めになる内容！ 綺麗で上品な装幀！
堅牢無比の製本！ 純真な兒童に
安心して與へられるカナオトギは本叢書です

終

